# 神崎涼の失踪

紅月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神崎涼の失踪

【Ｎコード】
Ｎ３５５７Ｉ

【作者名】
紅月

【あらすじ】
その日、神崎悠はいつもどおりの残業を終えて家に帰るところだった。家に帰る途中で彼はふと足を止める。目の前にはどこかの制服を着た高校生と思しき少女が１人倒れていた。彼はそれを保護して悩んだ、悩んだ末に明日の朝、昔から何かと縁のある友人の家へ連れて行くことを決めた。
よほどのことがない限り悠の視点で話が進みます。悠が出ないときは作者視点です。視点が変わるときはあらかじめ書きます。ただし、作者視点の時は前置きはありません。

## プロローグ（前書き）

あわわわ初投稿なのです。紅月（こうづき）と申します。このたびはこの小説「神崎涼の失踪」を読みにきていただいてありがとうございます。今の所残酷描写が出てくるかはよくわかりませんのであしからず。さてさて、ではでは

# プロローグ

俺の友人の話をしようか。唐突に何かって？いや、わざわざ俺に会いに来るくらいだろ？
それに、お前は・・・いや、なんでもない、気にしないでくれ。お前の用事ってのは何かなんとなくわかるから。わかるからこそきいてほしい。
そいつは普通の家庭に生まれた普通の長男だった。幼稚園児だったころからの腐れ縁だ。一応周りからは親友として認識されているのだが俺はあまり認めたくない。何かあるたびに厄介ごとを押し付けてくるやつを俺は親友とは思いたくないんでな。ん？友人の話じゃないのかって？とりあえず友人と呼ぶには構わないとは思っているから間違ってはいない。
おっと、少し話がずれたか？
話を戻すぞ？
そいつの状況が普通じゃなくなったのはあいつが高校二年生のころのことだな。まず、親が離婚した。理由は父親の浮気だった。離婚してすぐに再婚した父親とは完全に縁が切れた。そいつには妹がいたが父親は連れ子を認めないと言った再婚相手にあわせて子供を2人とも母親に押し付けた。慰謝料すら払わなかった。それも再婚相手の意思だったらしい。
そこまでは、まぁよかったんだろうな。ひどいと思われようが、そこはまぁ、よくある話の一つだ。それに母親の方がそれなりに収入があったから2人を養うには十分だったんだ。確か、このときはうだるような暑さが和らいだ9月過ぎのことだったと思う。まぁ、時期なんてどうでもいいよな。
俺もこの時期はいろいろあってそいつどころじゃなかったんだ。学校も違っていたし、そのころのそいつとの付き合いは微々たる物だったからな。俺も噂で聞いた程度だったんだ。で、その噂には続

きがあってそいつにはさらにつらいことが起こったらしい。
小、中学校のころはそれなりに、というかかなり付き合いがあったんだがそいつは俺と高校を違うところにしたから。もう一度言うが完全に噂で確かなことはよくわからない。
妹と母親が失踪したらしい。
嫌になるくらい雨が降る6月のことだった。とはいってもそいつはさほど困るわけではなかったようだ。もともと一生懸命働いていた親の代わりに妹と家事をしていたようだし、親が家に現金を（かなり）多めに残しておいたおかげでそいつにはバイトを探す余裕と、大学へ行く時のお金を用意できたからな。で、それなりに頭のよかったそいつは中高大とエスカレータだった俺の学校に戻ってきた。大学生になるころには俺のほうのごたごたは終わっていて、そいつと俺の高校時代の友達と仲良くしてたんだ。
そして、俺たちは卒業した。進路については俺もそいつも親がいなくていろいろもめたらしいが俺は在宅で仕事するプログラマになった。そいつは俺の家の近所のマンションに戻ってきて普通のサラリーマンになった。
何でこんな話をしたかって？どうしても話したいんだよ。そいつに起こったこの世の物とは思えない体験談を。普通の人ならきっと信じないだろうな。でも本当にあったことなんだよ。

ああ、名乗ってなかったか？俺は十狩月華。そいつ、神崎悠（カンザキハルカ）に起こったことが本当のことだといえる。数少ないというか当事者以外では唯一の人間だよ。少し、というかかなり長くなると思うけどきいてほしい。あんたならきっと信じてくれると思うからな。

◆◇◆◇◆◇◆

「キミ達は、だれ？」
「……。」

「答えないとは、いい度胸だね。」

相手は黒尽くめに、仮面。一言も話さないのはボクを自身より上だと認識した上での緊張からだろうか？なんにせよ、今はこんな連中に構っている暇なんてない。スズと、ほぼ同時に襲撃されているということを考えると…。

「仲間か…。」

無言は肯定なのか、否定なのか。相手が襲い掛かってくる。応戦するが、倒すまでに至らないうちに敵は姿を消した。魔力の軌跡を追ってみたが不自然な途切れ方をしている。

スズの方も調べてみるが、こちらも不自然な途切れ方をしている。この途切れ方には、覚えがある。それに思い当たった時に唇を、強くかみ締める。

間に合わないと分かっても駆け出さずにはいられなかった。

## プロローグ（後書き）

えっと、いかがだったでしょうか？
タイトルは考えた時に某団長の小説を思い返してしまいましたがまったくの別物です。
よろしければコメントください。
作者、登場人物問わず質問があれば受け付けております。
とは言っても登場人物はまだ月華だけですが・・・
あ、悠も名前だけだけど出てますね
それでは、これから末永く付き合っていただけるとうれしいです
投稿ペースは週１のつもりです
土、日、月あたりには投稿するつもりですが、これは自分の都合、
余裕などにより変化しますので
あ、もちろん手厳しい指摘もございましたら快く受け付けております
もしもメールを送りたい方がいればこちらｈａｐｐｙ_ｆｉｒｓｔ
_ｔｅａ@ｙａｈｏｏ．ｃｏ．ｊｐ

## 第一話（前書き）

『さて、一話目が始まるわけだけど・・・なんでそう不機嫌そうなのかしら？』
「なんでって、どうしてボクらがここにいるわけ？」
『いえねぇ、面白そうなことしてるって聞いたもので作者に声をかけたら「前書きに出てくれるんだね！！ありがとう！！」って言ってどこかに行っちゃったのよ』
「前書きに書くことがなかったんなら書かなきゃいいのに」
『でも、作者は変なところで生真面目だから埋められるところがあれば埋めときたくなるのよ。自己紹介文も適当なことが書いてあったわ』
「・・・」

# 第一話

その日、俺こと、神崎悠（カンザキハルカ）は昔からの付き合いのある十狩月華（トガリツキカ）の家へとむかった。

十狩　月華という名前の俺の友人を紹介しよう。若干、２４歳にしてその業界では天才プログラマとして活躍している。現在存在している有名どころの機密情報は彼のプログラムに守られているといっても過言ではないといわれているくらいだ。彼は在宅での仕事で特定の会社に所属しているわけではないので企業にしてみれば彼に涙をのんでお金を払っていることになるのだろう。会社が涙を流す理由はお金よりも機密情報が赤の他人に守られていることだろうな…。

ちなみに男だ。昔（主に中学、高校時代）にはこの名前でいろいろとからかわれたらしい。…からかったやつがどうなったのかについては何も言わないでおこう。

結婚もしていない、恋人もいないという月華は昔から一人で住んでる家に今も一人で住んで仕事をしている。噂によるとすでに一生を遊んで暮らせるだけの収入があるらしいが本人は今も仕事をしている。

玄関の前に立ってインターホンを押す。待つこと数十秒、扉が開かれる。いまどきカメラ付きのインターホンじゃないというのはかなり無用心だと思うが、彼は一向に気にしていない。大学に入ったころからしているイヤーカフスについた石が揺れる。そして彼は俺を見て開口一番にこういった。

「おい、その隣にいる子供は何だ」

そう、ネクタイを締めてスーツを着た出勤前のサラリーマンの姿をした俺の横には高校の制服のような物を着た少女が不安げに立っ

ていた。はじめに言っておこう、俺は別に犯罪を働いたわけではないもう一度言っておこう、俺は別に犯罪を働いたわけではない。

「お前、そんな子供にまで手を出したのか？」

「そんなことを言わないでくれ。俺にはもうお前しか頼れないんだ。だいたい、俺が、一度も犯罪を起こしたこと、がないのはお前だって、知ってるだろう？」

「それと、これは、別だっ。俺に、厄介ごとを持ち込むな、といったはずだよなぁ、悠。」

何度でも言っておこう、俺は別に犯罪を働いたわけではない。月華が、何度もやったみたいに言うがこれまでにそんな事は一度もない。戸を即行で閉めようとされたのを阻止しながら俺は体を玄関の中にねじりこませる。少女も中に入れて会社に行ってから説明する、とだけ伝えて、今度は俺を出さないようにと閉められた扉を無理やり開けて外に出た。

「ちなみにそいつの名前はユウだ、安心しろ、俺は逃げん！！」

月華が何かを言っているがそんなことを気にしている暇はない。なぜなら電車に乗れなくなってしまうからだ。ここからだと駅まではだいたい１５分ほどかかる。今から行けばぎりぎりかもしれないが、どうにか間に合うだろう。

逃げんとは言ったが厄介な人間を、厄介なことを拾ってしまったら月華に押し付ける。それが、俺が学んだことだ。あいつに任せればたいていのことは片付けてくれる。うん、これで万事解決。

◆◇◆◇◆◇◆

「えーと、ユウ？」

1人残された月華はとりあえず少女とコミュニケーションをとろうと試みるが少女は首をかしげ、その場から動こうとしない。染めているのかわからないがきれいな茶髪を二つに縛り、軽くウェーブのかかった髪の毛をしている。

月華が歩くとついてくる。月華が止まると止まる。

しばらく声をかけてみたりしたのだが、こちらから声をかけると反応はあるのだが向こうから声をかけてくることはない。とりあえずトイレの場所だけを教えておいて、リビングまでついてこさせ、テレビをつけてその前に座らせる。月華はお茶の入ったボトルとコップをを少女の横において仕事部屋へと向かい、仕事を始めた。キーボードをたたく音がしばらく続く。

「とりあえず戻ってきたら一度絞める。」

ああ、でも逃げるだろうから何がしか手を打っておいた方がよさそうだなぁ。悠の動きはすでに読んでいた月華。怒りのこもった呟きを発して家を出る準備をする。その思いが届いたのか同時刻電車に乗り込んだ悠は寒気を感じたとか。

月華は、ユウをつれて家を出た。

## 第一話（後書き）

「ボクら、後書きにもいるけど、いいの？」
『逃げた作者には聞けないし、いいんじゃないかしら？』
「メモはあるんだよね、「君たちが名乗らない限り何を話してもいい」って」
『まずは作者に代わって謝罪かしら』
「そうだね。週一更新とか言ってたのに今週二度目の更新になりました。作者曰く週二更新にするそうです。
これからは土日に一回と、水木に一回にするそうです
最低でもそのどちらか一回は更新するらしいですので、来週を待っていた人には謝罪を、ということで」
『何でも、理由は一週間が思いのほか長かった、だそうよ。
あと作者がパソコン使うのは夜中なので木曜更新のつもりでいたら日付が変わってたなんてこともあるみたいだから気をつけて』
「わけわかんないね・・・」
『じゃあ、今回はここまでね。
この作品では皆さんからの感想をお待ちしております。感想に限らず手厳しい指摘や、キャラクター及び作者への質問も受け付けております。
メールをしたい方はこちらまでｈａｐｐｙ_ｆｉｒｓｔ_ｔｅａ@ｙａｈｏｏ．ｃｏ．ｊｐ』

## 第二話（前書き）

『大変よ、作者が今日次の話を投稿したわ』
「まぁ、作者の方にも訳があって、今日明日と学校祭だけど明日は投稿する元気がきっとないからだって」
『へぇ』
「まぁ、作者は期限が〇〇日か××日と言われたら遅い方を選ぶ性格をしているからね」
『先延ばしした結果、気付けば期限の直前ということはよくあるそうね』
「小説の投稿が遅れないことを切に願うよ」

# 第二話

「で、俺はどうして正座させられているんだ？」

月華の家、俺は黙ってとんずらするつもりだったのだが月華のやつはどうやったのか俺は気づけばあいつの家に正座していた。目の前には夕食を食べている月華。確か、今日は厄介なもの（ユウのことだ）をうまい具合に月華に押し付けることができてラッキー、とか思っていたんだよな。それで、ゆっくり酒でも飲もうか、と思って扉を開けたらなぜか月華の家の玄関で、月華が目の前にいてつかまってしまったんだよな…。そのことを思い出しながら俺は月華に抗議の声を上げる。

「だいたい、俺は家に帰ったはずだぞ。」

「なに、昔の知り合いにもらったものでちょっとな。」

あいつは笑顔でこっちを向く。あーすいませんすいませんほんっとうに逃げようとしてすいません。だからその笑顔やめてくれませんか？てか、その知り合いなんかおかしくないですか？そいつは魔法使いですか？

という心の声が聞こえるはずもなく月華は相変わらず笑顔を崩さないままテレビを見ているユウを指差す。

「で、こいつはなんだ？」

「説明すると長くなるんだがな、一昨日、俺はいつもどおり残業を終えて帰るところだったんだ。」

駅から家まで歩いている途中の悠は家の近くで倒れているユウを見つけた。家の近く、と言っても駅から約五分のところにあるマン

ションの三階、悠の家の前の廊下にいた。
擦り傷や、浅い切り傷（どちらも出血は止まっていた）はあったものの深い傷を負っていたわけではなかったが、とても弱っており家へ連れ帰って介護した。で、だいぶ回復したもののまったく話さない。聞こえてはいるのだろうが話さない。呼び名がないと不便なのでとりあえず悠（ハルカ）からユウという名を与えた、と月華に説明する。
本当は昨日つれてくるつもりだったのだが、ユウの回復があまりよくなかったので今日つれてきた、ということは話さなかった。それを言ったらこの意地の悪い友人は何を俺に対してするのか分からないからだ。いいことではないのだけは保証できる。

「なるほど。」
「それで納得するのか？」
「俺はもっと荒唐無稽な話を知っているし、認めたくないがお前はこういうことで嘘をつかないからな。」
「それはほめているのか？」
「それより、あいつ話すことはできるぞ？」
「マジか？」

月華曰くユウには朝からずっとテレビを見せていたらしい。昼ごはんを食べようと思ってユウに何を食べるかたずねたところ返事が返ってきて、月華が話しかけるとちゃんと返事したらしい。

「そういえば、あいつはじめに話しかけたときは何にもしゃべらなかったしなぁ、しゃべれないってことを忘れてたよ。」
「なんてしゃべったんだ？」
月華によると少し話してみた感じでは
「お前の名前は？」

「ユウだってあの人が言ってた。」
「あの人ってのは？」
「あたしを助けてくれた人」
「じゃあ、自分の家わかるか？」
「ううん、何にも覚えてないの。」

結果：記憶喪失（仮定）。
　何も覚えていないので何処から来たのか、また、何があって倒れていたのかなどはまったくわからない、ということだ。言葉についてはおそらく普段から使っていた物だから簡単に思い出せたのだろう、というのが月華の見解だ。
　こういうときはどうすべきか。

「ドラマとかだと、家出の情報を探すんだよな」
「お前が探せよ」
「何でだよ！！お前も手伝ってくれよ！！」

　しれっと言い放った月華に悠がくってかかる。月華は夕食を口に運ぶ。夕食がまだの悠にとってはうらやましい限りだ。

「なら、俺が警察に言って聞いてくるからお前はネット上で何か調べてくれ。」
「それなら構わないが、警察に行ってなんて言うつもりだ？」
「え？そりゃああったことをそのまま…。」
「「家の前で倒れていた女の子を保護しました、どうやら記憶喪失みたいなので行方不明者の名簿でも見せてくれませんか？」っていうのか？
　警察が信じるわけないだろうし、信じてもお前が犯罪者扱いされそうだな」

ニヤニヤ笑う月華。昔の女っぽい顔の面影は今はなく、かっこいいという形容詞がぴったりな顔がこの笑顔によってより際立っているといっても過言じゃない。これでこの性格と仕事じゃなければものすごいもてただろうに、頭を抱えながら悠は確かにその通りだと思う。

でも、そうだとすると情報が集められない。

「お前、絶対性格悪くなったよな。」

「そうか？」

「で、どうすればいいんだろうな？」

「それなら、俺は警察に少しばかりツテがあるからこれをもっていけ。」

月華はさらさらっと紙に何かを書いて封筒にしまう。それを見ながら悠は言う。

「お前のコネって引きこもりの仕事の割にはすごくないか？」

「ま、昔いろいろあったんだよ。あと、引きこもり言うな。」

「２４歳に昔って言われてもなぁ…。」

「よし、これを警察署にいる笹田っていうやつに渡すといい。受付で笹田を呼んでもらってこれを渡せ、俺からだといえば絶対に受け取る」

封筒にのりで封をして悠に渡す。それをしげしげと眺めながら悠はこれからの計画を口に出して形にした。正直、さっさと警察の方にユウを保護してほしいのだが、それができるかどうかはまだ、分からない。

「とりあえず、明日は会社は休みだし行ってくるか…。早いほうがいいだろうしな。」

「明日は様子見だから、ユウは警察に保護してもらえないぞ？それに、笹田はそういうことができないから、あんまり甘い考えを起こすなよ？」
「お前は俺の考えを読めるのかよ！！」
「長年の勘だ。仕方がない。」
「仕方がない、で片付けるなよ！！」

いや、マジで。こいつなんなの？時々思うけど、心読むとか何処の超能力者なの？…月華だけど。

## 第二話（後書き）

「そういえば、作者がいないから今回も後書きにいるけど、ボクらって前書き出演分のギャラってもらってるの？」
『そういえばその話をしてなかったわね。とりあえず探し出して聞いてみるわ』
「・・・もう、行っちゃったね。じゃあ、今回はここまでということで
この作品では皆さんの感想を待ってます。手厳しい評価も受け付けております。出演キャラクター及び作者への質問も受け付けております。
感想をメールで、と言う方はこちらのアドレスを使用してください
happy_first_tea@yahoo.co.jp」

## 第三話（前書き）

誰かが誰かを思う

ただそれだけが

途切れることのない鎖なのだと――

# 第三話

悠が月華に無理難題（？）を押し付けられている時から時は少しばかりさかのぼって、某所。一人の少女が少しばかり息を切らして立ち尽くしていた。

「やられた…。」

そうもらした少女がいる場所は建物と建物に挟まれた行き止まりの道。そこにあるのは学校指定のかばんで、中身は教科書やノートのほかに携帯のような物も入っている。

「端末は壊れてるし、”穴”があいてるし…。おまけに戦闘の後まで垣間見えるし…。

どうやらはじめから二手に分かれていてボクのほうが形勢不利になったらスズを人質にするつもりだったみたいだね。でも、ボクの方に来たやつを見てると多分、違うね。ボクを足止めして、スズを狙った感じだね。でも、予想外の反撃をくらったと。」

先ほど、少女の端末に助けてくれ、とスズから連絡が入った。急いで助けに行こうとしたのだが、邪魔が入ってしまい、到着が遅れた。普段なら、一人でどうにかできただろうに、今回のは違ったらしい。それだけ敵が強かったのか、多かったのか、はたまた、スズと相性が悪かったのか。

携帯のようなもの―端末―をいじりながら目の前の地面を見る。少女の目の前には黒くて暗い穴がぽっかりと開いていた。穴はいびつな円形をしており、不安定に広がっては狭まり、を繰り返している。どうやら少女はここに至るまでの過程を予想しながら現状を確認しているようだ。

「だいたい、ボクに挑んでくるなんてのも思ってなかったけど、まさか、スズを狙うなんてのも思ってもみなかったよ。ここまで、裏をかかれるといっそ感心してしまうね」

そこまで言って、少女は一息置いて空を見上げる。そこにある、いつもならきれいだと思える青空も今日だけは少しばかり憎たらしい。いつもいつもその青さのようにすがすがしい気持ちで人がいれると思うなよ！！そう叫んで再び現状把握に努める。

「スズもどうやら反撃はしたみたいだけど、撃退までにはいたってないみたいだね。そのせいで敵の術者に穴を空るだけの時間を与えてしまったし、それに巻き込まれてしまった、ということかな？それもこれも、ボクがちょっとばかしミスをって言うか、あいつをすぐにしとめなかったのが悪いんだけどさぁ。

でも、まさか穴をあけれるような術者がいるとは思ってなかったよ。穴を開けたのは一人の力じゃなさそうだね、歪んでいるのはそのせいかな？」

不安定だし、今にも閉じそうだし、ボクほどきれいにできてるわけじゃないし。

先ほど、少女を襲ってきた黒尽くめを思い出しながら、状況を見続け、頭をかいている少女の髪が手の動きにあわせてさらさらと動く、その色は金。

そして、自分がすべきことを決めたのかどこかに連絡を取ってからチョークを取り出して線を引く。まるで、その道をほかと分けるようにして。

「？空間切離？？空間固定？、後は・・・？空間追尾？」

この空間を切り離し誰も入ってこないように。
この空間を固定して穴が閉じてしまわないように。
穴が何処の空間に繋がっているかを確かめるために。
それだけの言葉を発して少女は地面に座り込むと、何処からともなくパソコンのキーボードを取り出して文字を打ち込みまた、一言。

「パネル、オープン」
『音声、パスワードトモニ承認シマシタ。起動シマス』

機械音とともに青みがかった画面が現れる。少女はまた、キーボードをたたく。そこに現れるのはいくつもの画面と、高速でスクロールされていくよくわからない文字の羅列。それらすべてを追っていけているとは思えないが、少女の目がせわしなく動く、その色は緑。

「とりあえず、この穴が繋がってる先を見つけないと…。スズを襲ったやつらを片付けるのはその後だね。」

少女の言葉に力がこもる。自身をあざけっているのか、それとも自身を嵌めたやつらを呪っているのか、それは声だけでは判断することができない。いや、この場合は怒りだろうか…。

「ボクに、いや、カンパニーに、かな?手を出して負けた連中の悪あがきが許されると思うなよ。」

唇の端を吊り上げながら怒りを笑顔でごまかすようにして少女は言葉を続ける。緋色の衣を纏った少女のきれいなその唇からは少女におよそふさわしくない、似合わないような言葉がつむがれる。誰もやってくることない路地、少女がたたくキーボードの音だけが存在している。少女が一体何をしているのかを問う人物もここにはい

なかった。

「ああ、もう、わかってるって。悪いのはすぐにこれなかったボクだから黙っててくれる？

だいたい、やつらの身元がわからないってだけでも結構困るんだから…。これで蛇が知らなかったら大変なことだよ。」

時折、誰かと会話しているように少女が口を動かすがその場にいるのは少女一人。

どれだけか時が過ぎ、何か分かったのか、それともあきらめたのか、少女はその場を去っていった。

少女が去った後の道には穴も、戦闘があったであろう跡も、なくなっており、周りの道とまったく変わらないような状況になっていた。

## 第三話（後書き）

「・・・」

『言いたいことがあったら言ってもいいわよ』

「それじゃあ、ふざけんな！！作者！！

「今回から前書きには意味深げなことを書きますから君たちには前書きに出てもらった報酬として後書きに出てもらいます」ってボクたちのことなめてない？」

『じゃあ、今度からここでは製作秘話のようなものを少しずつさらしていこうかしら』

「この作品のタイトルの涼っていう字はスズって読むんだって」

『作者が投稿したあとに振り仮名つけようか悩んでつけなかったのよね』

「けっきょく「振り仮名ふるとかっこよくない」というふざけた理由でふってないんだよね」

『後書きも長くなってきたしこの辺にしましょうか

この作品では皆さんからの感想、評価、指摘、キャラクターへの質問をお待ちしております

質問は別に作者宛でも私たち宛でもいいそうです

質問はこちらまでｈａｐｐｙ｜ｆｉｒｓｔ｜ｔｅａ@ｙａｈｏｏ．ｃｏ．ｊｐ』

## 第四話（前書き）

あの日の夜に初めて逢った

きっとあれが、運命ってやつだったんだろう

# 第四話

次の日、会社を休んだ俺は警察署へ向かった。横にはユウもいる。見知らぬ（記憶が無いからそうなるだろう）外に出たせいか、おびえ半分好奇心半分といったところだろうか。

月華がどうせなら本人もいたほうがいいだろうといって押し付けてきたのだ。正直、何の罪も犯していないのにこんなところへ行くのは嫌だったのだが自分が拾った厄介の種（ユウの事だ）をさっさと手放すためにも俺は受付へ向かう。

「すいません。」

「はい、何でしょう？」

「笹田さんという方はいらっしゃいますか？」

「笹田、ですか？失礼ですがアポイントメントはおありですか？」

「十狩がきたといっていただければ十分だといわれたので。」

受付の女性は胡散臭げに思っているような顔をしながら笹田に連絡を取った。そりゃあ、そうだ。俺だって、アポもないはずの人間がやってきたらそいつをいぶかしむだろう。

さほど待たないうちにやってきたのは、熊のような見るからに体育系な大男。俺もけして背は小さくないのだが彼には横幅があるため俺よりもかなりでかく見える。

「十狩ぃ！！オレはお前のパシリじゃねぇって何度言えば…。」

声も見た目どおりかなりでかくて彼の声がロビー中に響き渡った。俺は突然の大声に驚いてその場から動けなくなる。ユウもあまりの大声に驚いたのか、怖くなったのか、俺の後ろに隠れる。だがこの大声に対して他の人の反応は冷たかった。慣れているのだろうか？

そんな大男は大声で緊張している俺を受付の女性から紹介され、上から下まで二往復ほど悠とその後ろに隠れているユウを見てから急に頭を下げた。

「すまん！！まさか違うやつが来るとはおもっとらんかったんだ。いつもと違って携帯に連絡入れてくるんじゃなかったから、おかしいとは思っていたんだがな。」

謝っている声もでかい。ユウがさらに小さくなるかのように俺の後ろに隠れようとする。

「いえ、いいですよ。こちらこそ突然すいません。」

ロビーの横にあるソファへと案内された。座った悠とユウにびっくりさせた侘びだといってコーヒーとオレンジジュースをおごってくれた。……意外に優しい。あ、失礼だな。

ユウは（はじめて見る）紙パックに興味津々のようだ。彼はなかなか有能な人らしいというのは、笹田、という月華の知り合いだという人物に興味があったので、受付の人から彼を待っている間に聞いていた。

彼のおかげで解決した事件もそれなりに多いらしい。でも、普通なら仕事で忙しくて呼び出したら仕事に差支えが出そうだが彼は根っからの現場肌らしく書類仕事はむしろ任せる方が不安なのだと、彼女は愚痴るようにそう言っていた。改めてみた印象は、ああ、確かに現場肌の人だろうなぁ、だった。よく言えばまっすぐ、悪く言えば直情的な彼は俺の目の前で何度も謝っていた。

「驚かせて悪かったな。はじめから俺が十狩のやつだと思い込んでなければよかったんだよな。」

声も意気消沈している。でもやっぱり声は大きい。心なしか体もそれにあわせて縮んでいるように見える。でも、体はやっぱり大きい。

「で、十狩がお前らを俺のところへやらせた理由は何だ？」

「あ、これなんですけど…。」

月華から渡された封筒を笹田に渡すし、乱暴に封筒を開けて読んでいく。しばらくすると笹田は何も言わずに紙をびりびりと破り捨てた。顔が赤くなっている。怒っているのか？そしてユウの方を見つめる。

ユウははじめの大声があったのか再び悠の後ろに隠れようとする。実際は悠は隣に座っており完全に隠れることは無理だったのだが…。俺も怒鳴られるかと思って身を硬くしてしまった。だが、笹田は大きくため息をつくともう一度ユウを見てあきらめたように言った。

「ちっ、面倒だがやってやろう。そいつの顔は一応覚えたし写真があるものから調べてみる

なんかわかったら連絡してやる。怖がらせて悪かったな、えー…。」

「ユウ」

ユウがポツリと消え入るそうな声で自分の名前を告げる。

「悪かったな、ユウ」

人懐っこそうな笑顔を浮かべて立ち上がろうとした笹田をユウが止める。

「あの、笹田さんは月華おにーちゃんとどんな関係なんですか？」

一瞬空気が凍る。月華『おにーちゃん』！？
なんだ、一体ユウと月華の間に何があった！！
俺は恐る恐るユウに尋ねた。

「えっと、ユウ？月華『おにーちゃん』ってどういうこと？」
「えっと、笹田さんとあって一番初めに月華のことを呼ぶ時はこう呼べって、そう言われていたので、それ以外は名前を呼び捨てで呼ぶように、って言われました。」

ああ、月華がほくそえんでる顔が浮かぶようだ。笹田の方は何かをぶつぶつとつぶやいている。よく聞こえないがおそらく警察の人間としてはふさわしくない物だろうという予測はできる。俺だって、きっと同じことを思ってるよ。

「教えて、くれないんですか？」

ユウがたずねる。どうやら笹田の大声と態度の恐怖よりも好奇心の方が上になったようだ。だが、確かに気になるのは事実だ。あいつはどうやってこの笹田との関係を得たのだろうか？
笹田はまじめな顔をして深く息を吸ってそして大きな声で言った。あまりの声の大きさで風圧が発生するかと思ってしまった。恥ずかしい。

「それは、言えん！！」

ユウは若干、涙目になっていた。俺も泣きそうになっていたかもしれない。

「俺も気になるんですが…。」
「それを言うとオレは警察を首になってしまう可能性があるんでな。

まだ若いのに職なしというのは嫌だからな。
詳しくなくていいならオレはあいつには一生かけても返せないような恩、借りがある。それだけだ。」

それ以上は硬く口を閉ざされて何を言っても教えてくれなかった。さすがに、首になると言われてなお、追求するような度胸は俺にはなかったので、聞いていたのはユウだったが、暖簾に腕押し。笹田は優しく笑うと大きな手でユウの頭をぽんぽんとたたいて席を立って行った。むしろそそくさと席を立っていったといったほうが適当な気がするが…。

## 第四話（後書き）

「今回の製作秘話は作者が投稿しようと思った理由だけどさ」
『確かその時読んでいたガルー・ブレスト先生の『平凡ではない日常。』に神崎涼っていうキャラクターがいたのよね』
「このタイトルの神崎涼とおんなじ字だって、その時は自分のＰＣの中だけで『失踪』を書いてた作者はものすごく驚いたんだよね」
『ええ。で、向こうの方は神崎涼（カンザキリョウ）で、それを見た作者は「よし、投稿しよう」と思ったそうよ』
「また脈絡の無い・・・」
『で、その勢いでユーザー登録をして、即、投稿したというわけね』
「そういえば作者曰く「反省も後悔もしている」だってさ」
『どうするのよ、そんなので』
「でも、投稿するのは楽しいんだって」
『この間も、評価をいただいて、お気に入り登録もしていただいた方がいるって狂喜乱舞してたものね』
「ま、いいんじゃない？作者自身は続ける気満々だし。
というわけで、この作品では皆さんからの感想、評価、及びアドバイスもしくは手厳しい指摘など何でも心から待っています。
キャラクターへの質問などがある方は感想、またはメールでどうぞ。
メールはこちらからｈａｐｐｙ｜ｆｉｒｓｔ｜ｔｅａ@ｙａｈｏｏ．ｃｏ．ｊｐ
ところで勝手に作品の紹介してるけど、いいの？」
『作者が「誹謗中傷みたいなことは言ってないから大丈夫！！」だって言ってたわ』
「ならいいか」

## 第五話（前書き）

あそこは、何処だったろうか？

あの人とは何処で出会ったのだろうか？

解決できない疑問が駆け巡る・・・

# 第五話

―ユウ―

私は神崎さんと警察署という場所を出た。ドラマばかり見ていたりすると、ここへ来るのは悪いことした人たちばかりだと思っていたので、月華や神崎さんがここへ行くと言っていたときは怖くて仕方がなかった。そこら中に凶悪な犯罪者が歩いていて、常に危険な場所だと思っていた。でも、実際はそんなことは無かったみたいでかなりほっとした。あと、笹田さんはやさしかったけど怖かった…。

ところでどうして月華は「月華おにーちゃん」なんて呼ばせたんだろう？そう思ったところで私は警察署を出たところにいる黒いスーツの人たちに目が行った。三人いるが、警察という場所だと余計に怪しく見えるその人たちに、私は恐ろしい物を感じて神崎さんの後ろに隠れた。黒いスーツの人は私たちに気付いてにこやかに、せわしくこちらへやってきた。

私の身長は神崎さんよりも低くて、神崎さんの目の前に立った彼らは神崎さんよりも少しだけ背が高かった。

「お探ししたんですよ！！お嬢様！！」

彼らのうちの一人がそういって目線を私にあわせるようにしてかがんできた。どうやら、この人たちと私は知り合い？らしい。私にはその記憶はまったくないのだけど、彼らの感じからするとそうなのかもしれない。でも、その目になにか嫌な物を見た気がして、私は神崎さんの上着のすそを強く握り締め、その人から目をそらした。今すぐ、ここから離れたいということしか、考えられなくなった。

―悠―

警察署を出るとユウがなぜか俺の後ろに隠れるので不思議に思って辺りを見回していると、黒スーツが俺たちに近寄ってきた。妙になれなれしい態度を取っているそいつらはユウをお嬢様と呼んでいた。ユウとこいつらが既知の間柄かはわからないが、ユウがおびえていることだけはわかったから、さらに一歩前に出てユウと彼らの間に壁になるように立った。

「すいませんどちら様ですか？」

声はあくまでも柔らかく、でも、明らかな拒絶を持って相手を見る。それが通じたのか、相手は少しばかりか不機嫌になりながらも答えてくれた。

「われわれはさるお方からの命令でそちらのお嬢様の行方を捜していたのです。行方不明になられた時にはどうしようかと思いましたが無事でよかったですよ。

さぁ、お嬢様、帰りましょう？」

まるで、お前には用はない、といわんばかりの（実際そうだろうけど）その態度に少しばかり腹が立ったが、それをおさえて後ろのユウを見た。最後はユウに向けられた物だろう、が、ユウは一向に俺の後ろから動こうとしない。俺の後ろに隠れたまま、彼らと目を合わせようともしていない。

彼らの話し振りからすると友好的そうだが、ユウの反応を見ていると、ユウと、こいつらの関係は明らかに友好的なものではない。ユウの態度でそういっているのがわかった。

では、どうしようか？

月華なら、どうにかして叩きのめすだろう。あいつは言葉よりも暴力派だ。家に引きこもっている割に、けんかは強いし、性格は意外にも喧嘩っ早い。

でも、俺はそうではなく、平和を愛する人間なので、こういうときは厄介ごとを起こさずに逃げるに限ることにしよう、と俺は思った。ユウをさっさと元の場所に（追い）返してやりたい思いはあれど、こんな怪しい連中に渡す気もさらさらない。

俺はちらりと車の位置を確認した。俺の車は入り口の近く、鍵は無用心だがかけていない。警察の目の前で犯罪は起きないと思っていたからだが、今はその思いに感謝している。何しろ今この瞬間に何か起きそうだからな……。

そして俺は深呼吸するとユウの手を引いて走った。突然のことなのでやつらは反応できなかったようだがユウは状況を理解したのか急いで手を払い車の後ろの座席に乗り込んだ。

「出すぞ！！」

それだけ言って車を動かす。後ろでユウがどこかをぶつけたようだが今はそれどころではないので気にせず車を動かし続ける。ここから月華の家まではおよそ十五分、人目を気にしてわざと車の多い道を選んで行く。

だいたい、こちらは車、向こうが乗っていたような車はあのあたりにはなかったようなので間違いなく向こうは追いつけないはずだ、そう思った時サイドミラーに黒い影が映った。それは警察署にいたはずの黒スーツ。

「マジかよ！！」

俺はそう叫ばずにはいられなかった。

―ユウ―

「マジかよ！！」

神崎さんがそう叫んだのを聞いて私は後ろを向いた。先ほどぶつけたところはもう痛くはなく、神崎さんの声に嫌な気持ちが浮上してくる。振り返ったそこにいたのは先ほどの黒いスーツの人たちだった。でも、あれは、人？

姿は人のものでもスピードがありえない。だってあの人たちは車よりも早かったのだから。記憶のない私の中の知識が叫ぶ、車より速く移動できる人間などいない、と。

その得体の知れなさに恐怖して私は彼らを見たまま自分のからだを強く、励ますように抱きしめる。私は自分が震えているのがわかるくらいに震えていた。その時だった――――。

「ユウ、怖いんなら見るな！！」

少し、車のスピードが上がる。神崎さんの声が聞こえるが、私はまったく別の光景を見ていた。覚えていない、名前を呼ばれた気がした。

昔の、記憶？

――には力がある。だからね、もし・・・が危険だと感じたら力を使っても構わないよ・・・。

頭をなでられる感覚。ふっと体が楽に、というか気持ちが落ち着くのがわかる。

「だれ？」

口に出したところで元の、黒いスーツの人たちに追いかけられている景色に戻る。私は思わずつぶやく、それが自分のすべきことだと、思えたから。きっと神崎さんには聞こえなかったと思う。

「これ以上、近づかないで。どこかに、いって」

その後のことはよく覚えていない。

気付けばそこは月華の家だった。

## 第五話（後書き）

「みなさん作者のことを指差して、あざけってやってください」
『突然、何があったかと思えば、どうしたのかしら？』
「作者は今までメッセージボックスの存在を知らなかったんだよ！！
これをあざけってやらないとね！！
作者も「何今までメアドさらしてたんだろう」って嘆いてたし」
『へぇ、で、今回の製作秘話は何かしら？』
「・・・そうだね『神崎涼』についてでも話そうか」
『話の確信を突くようなことをするのね』
「実ははじめは神崎”鈴”になる予定だったんだよ
作者は鈴の字好きだし」
『じゃあ、どうして涼になったのかしら？』
「作者はＰＣ内でいくつか他のも書いてるんだけどそれとダブったんだって」
『ああ、確か『黄鈴（コウリン）』なるキャラを考えていたわね』
「けっきょくその話は途中で行き詰ってしまったみたいなんだけど、そのころにはもう『神崎涼』で、決定してたし、作者もこの字面で納得してたからそのままなんだよ」
『ふーん、で、他にはないの？』
「他にはって・・・
前回も今回もボクがネタ提供してるんだし今度はキミが持ってきてよ」
『面倒だけど、仕方ないわね・・・
というわけで、この小説では皆さんからの感想、評価、はたまた作者がへこむような指摘だろうとなんだろうと心からお待ちしております
作者曰く「指摘だってもらえればうれしいんだぜ！！」だそうですのでなにとぞよろしくお願いします

また、キャラや、私たち、及び作者への質問もお待ちしております
質問は感想または作者のメッセージボックスへどうぞ』
「ところで、作者がこの小説をお気に入り登録してくださった方のページにいきたいってぼやいてたよ」
『なら、それができるかどうかも読者の人に聞いておくことにしとこうかしら
なので、お気に入り登録者のページへいく方法がわかる方は教えてください
ないなら「ないよ」というメッセージでも送ってください
そしたら作者もあきらめると思いますから』

# 第六話（前書き）

裏切り者は何処にだっている

そう、あなたの隣にいる人だって

# 第六話

―悠―

「襲われた！？」

月華が驚いた声を上げる。

仕事中だったのか、あいつの後ろにあるパソコンのウィンドウがぼんやりと光っている。こいつが驚くのも珍しいなぁ、と思いながら先ほどのことを話した。

ここは月華の家の二階、月華の仕事部屋だ。ユウは月華の家についてすぐに一階のリビングのソファにクッションを抱いて寝てしまった、相当疲れていたのだろうか。

振り向いた月華はぼさぼさの髪をひとつにくくっている。それがまた微妙に様になっているのが気に入らない、がここでそんなことを言っても話が進まないので俺は続きを話した。

「よくわからん黒スーツの連中だった。

ユウのことをお嬢様、と呼んでいたし、ユウとなんらかの関係はありそうだったがユウの反応を見る限りじゃあ……。」

「あまり友好的な関係じゃない、ということか。」

俺は肯定の意を表して頷く。あいつらに追いつかれるかと思うほど近づかれたわけではないが、あいつらはずっと同じ距離を保って、いや、途中からは徐々に減速しながら俺たちを追ってきていた。この家の車庫に車を入れて家の中に駆け込むときには不思議なことにやつらの姿はどこにもなかった。それを説明していると月華の眉間にしわが刻まれていく。腕を組んで考える月華、それも様になっておりこいつが引きこもりでよかったと、普通の見た目の俺は少し安

堵する。

「車と同じくらい、いや、それ以上のスピードで走る黒スーツか……。」

「誰も気付いてなかったみたいなんだ。俺が道交法を無視してスピード上げようかと思った時にあいつらが減速しなかったらやばかったと思う」

あいつらはきっと車がスピードを上げても追いかけてきただろうし、あいつらが減速することがなければあのまま追いつかれていただろうと思う。そんな予想ができる俺は頭がどこかおかしくなってきているんだろうか？

「車と同じくらい、いや、それ以上のスピードで走る黒スーツか……。」

月華がもう一度同じ事をつぶやく。まるで心当たりがあるみたいな、記憶を掘り起こしているような、その反応に俺は嫌な汗が体から出るのを感じた。

「まさか、と思うが月華さん、あのような方々とお知り合い、ということは？」

言葉が思わず敬語になっている。それを自覚したのは言った後だったのだ、しょうがない。誰も、突っ込むなよ？

「そいつらは男だったんだろう？」

「ああ、見た感じと声の感じじゃあそうだと思う。全員の声を聞いたわけじゃねーけど。」

「なら、俺は知らん、そんなことができる知り合いは男にはいない。

」
「じゃあ、女にはいるのかよ！！」
……思わず心の声が外に出てしまった。絶対に答えが返ってくることはないと分かっているからこその心の声だ。当然のように返事が返ってくることもなく、しばらくの間沈黙が続くのだが、腹が減ってきてしまった。
今は昼どきで、月華が笹田との面会を朝一番に指定してくれたおかげで考える時間はまだまだある。正直、今が夜で寝ることができたらどれだけ楽だろうという気持ちの方が大きいが、月華はユウが寝ているのを確認しに行った。ついでに昼飯も作るからお前もこいと言い残してだ。
俺はなんとなくすぐには動かずその場に、月華の仕事部屋に1人きりになる。
そんな時

ぴろりろりん♪

起動してあるパソコンにメールが届いたようだ。あまりにも、今の状況とはかけ離れた軽やかな音に気が抜けたが、なんとなく中身が気になる。いけないとはわかっていても好奇心の方が勝った。
おそらく月華はまだ帰ってこないだろうと思いつつメールフォルダをチェックする。

『ｆｒｏｍ　アリス

緊急なので用件のみ書いとくね
茶髪で学校の制服を着た高校生みたいな女の子を知らない？
知っているなら連絡してほしいんだけど』

という文面を見て俺はあせる。これはおそらくユウのことをさしているのだろう。どこにもユウの名前がないし、写真のような画像もない。そもそもユウがユウという名前なのかもわからないのだが……。

でも、なぜ、月華にこのタイミングでこんなメールが届く？まるで、月華の知り合いであろうこいつが、ユウを狙っているかのようなタイミングでユウの行方を尋ねてくるなんて。

そして、俺は、このメールを見ていて俺は嫌なことを考えていた。つまり、月華は先ほどは知らないと言っていた黒スーツのことだけれど、ひょっとしたら月華は知っているのではないか、ということだ。さらに、ひょっとしたら月華は何も知らないが、このアリスって名前のやつが黒スーツの親玉かもしれない。

「我ながら、嫌な思考回路だな。」

そうと口に出してみると嫌に現実味のありそうなことで身震いがする。あの月華の、驚きながらもなおも冷静だった態度を考えると。

俺はちらりと背中の方にある開かれたドアを見る。月華が、俺が来ないことで痺れを切らして呼びに来る様子はないし、足音も聞こえない。

もし、今、ここで「知らない」と返信をしたら？

相手はきっと、探している少女がここにはいないと思い込んでくれるだろう。そうすれば……。

急に心臓の音が大きくなったような感覚を覚えながら俺はそのメールを受信箱からもゴミ箱からも削除した。今さっき思いついた方法を実行、知らないというメールを送り返した上で、だ。その送信履歴も消しておく。それだけの作業がとてつもない重労働だったかのように引いていた汗が一気に流れ出る。息を整えると俺は月華とユウのいるであろうリビングへとむかった。

◆◇◆◇◆◇◆

（まさか、とは思うがあいつ関連じゃないだろうな）

月華はそう思いながらユウの寝顔を眺めていた。これだけ見ているとただの少女なのだが、車より早く走る連中に追いかけられていたということを考えると……。過去のことを思い出し、月華は頭を抱えたい思いに駆られる。実際、彼は頭を抱えていたのだが。

やがて、悩むのも面倒になったのか月華はキッチンへとむかった。冷蔵庫の中を確認しながら昼のメニューを考える。彼としては悠にまで料理を作るのはかなり嫌、というか面倒なのだがユウの分は作るつもりでいる。そして、二人分を作るのなら三人分を作るのも量が変わるだけでさほど手間ではないので作ってやることにする。

「頼むから、厄介ごとを持ち込まないでくれよ……。」

彼の切なる願いはユウがやってきた時点で（正確には悠から話を聞いた時点で）破綻していることに彼自身、うすうす感じてはいたのだがそう願わざるをえなかった。

## 第六話（後書き）

「ということで、今回のネタは？」
『製作秘話とは関係ないのだけれど、作者はランキングでこの作品を探そうとしたのよ』
「へぇ、で、作者のことだからきっと見つけたんだよね」
『・・・』
「なに？その遠い目は」
『前回の投稿した日のことだったのだけどね、あの日は寒くって作者も根負けしてしまったのよ・・・』
「大仰だよ、ため息までついて。で、何処まで調べたの？」
『総合評価が２ｐｔの範囲全部よ』
「・・・で、見つけられなかった？」
『そう、そこで作者はこう考えたそうよ「ならばもっと評価をいただくことができたら、もっと簡単に発見できる！！」と』
「図々しいけど、事実ではあるね。
というわけで、この作品では皆さんからの評価、感想、メッセージ、指摘など何でもお待ちしております。
キャラへの質問でも結構です。」
『あと、お気に入り登録していただいた方のページへ行く方法もあったら教えてほしいわ。
なかったらない、と教えてくださると非常に助かるわね。
作者はまだあきらめてないもの』

## 第七話（前書き）

疑うということ

気になるということ

探りたくなるということ

そのどれもが何処までも続く、下にむかう負の螺旋――――

# 第七話

三日後の夜は駅の近くにあるファミレスで食べた。警察でのことがあった後なので、外に出ることに俺は猛反対したのだが月華がいちおう、大丈夫（だと思う）と言い、何かあったら戻ることを明言したことと、その頑固な態度に俺が折れたのだった。

ユウはどこか楽しそうで外食に行くと聞いたときから笑顔が絶えない。外食に行くという記憶がないせいか、外食というものに期待しているようだ。

「何が食べたい？」

「ハンバーグってやつですかねー、あ、でもでもドリアってのもおいしそうですね。

月華や神崎さんは何にするんですか？」

熱心にメニューを見るユウ。さすがに服は制服ではなくて私服を着ていて、その私服は男物で、月華の昔の物を着ている。毎日、あの制服じゃあ可哀想と言うか目立つので月華が昔の服を引っ張り出してきたのだった。

昔の月華は（かなり）小柄だったためユウにぴったりだった。どのくらい小柄かというとだな、たしか当時のクラスメイトが女装させたらマジで女子に見えたと言っていたからそのくらいだと思ってほしい。下着は……笹田と会ったその日に俺が買いに行かされたが。もちろんユウと一緒にな？

「そうだな、じゃあ俺はドリアにしよう。」

「神崎さんはどうします？」

「じゃあ、俺は・・・カルボナーラにするか。」

「それなら私はハンバーグにします！！月華、それと私はこの抹茶

パフェというのも食べたいです！！あと・・・ドリンクバーもいいですか？」
「わかった。」

注文すると時間が夕食時なだけに出てくるまでにそれなりの時間がかかった。すぐ近くをウエイトレスが通るたびにうれしそうにむずむずしながらウエイトレスを目で追うユウはかわいかった。俺は別に変な人間じゃないぞ？

おいしく食べ終えて（今回は月華のおごりだったので俺も気持ちよく食べることができた）会計を済ませて店を出た。不思議なことにというか、むしろ当たり前だと思うが、怪しい黒スーツとは会わなかった。

「おいしかったか？」
「はい、とっても！！またきたいです。」

家に帰ってから俺がたずねるとユウは元気よくそう言った。ユウはおやすみなさい、と言って月華に与えられた部屋へと行った。月華がそれを見送り、俺は家に帰ろうと玄関から出て行こうとした。そんな時。

「お前、今日からここに泊れ。」
「は？」

月華の発言に俺は耳を疑った。こいつは突然何を言い出すのだろうか。いや、何か言い出すのはいつものことのような気もするが、さすがにこの発言は突拍子がない。

「いや、俺は今から家に帰ろうと思うんだが・・・。」
「やめておいた方がいい。・・・荷物を取りに一度おまえの家に行

く必要があるが、それ以外ではしばらく帰らないほうがいい。」
「どうしてだ？」
「お前の言っていた黒スーツの連中に顔を覚えられた可能性がある。この家の場所はわかっているいないだろうから、ここに泊った方が安全だと思う。
だから、そうしろと言っている。」

幸いすぐに使える部屋がもうひとつある、多少ほこりっぽいがそこは気にするな。それだけ言うと月華は出かける準備を始めた。どうやら、俺がここに泊り込むことは月華の中では確定事項のようだ。しぶしぶ従って家に帰り、仕事で必要になるであろう書類や、多少の衣服を詰め込んで再び月華の家へ行った。ちなみに月華はついてきたものの車の中で待機していた。あいつの提案でここに来ているのだから少しは手伝ってほしいものだと思う。
ちなみに、車の運転をしてきたのも俺だ。あいつは免許は2輪バイクのものしかもっていないし、あいつ自身4輪を買うつもりはないらしい。家の車庫にはきちんと整備されたバイクがあるのでそれは間違いなさそうだ。
俺は月華に案内された部屋に荷物を運びいれ、部屋の様子を確認する。シングルベッドがひとつに使い勝手がよさそうなデスクが一台にクローゼット。おかしい、あいつは一人暮らしだし、部屋が余っているのも頷ける。だがしかし、ここはあいつの寝室でもなければ、仕事部屋でもない。ただの空き部屋にこんなベッドやデスクは要らないんじゃないだろうか？
そもそも、なぜあいつはあんなことを言い出したのだろうか。あんなメールを送ってくるようなのと知り合いだということは俺を追い出しておいたほうがいいんじゃないか？どうして俺をわざわざ守ろうとする？
そもそも本当に守ろうとしているのか？
ユウはここにいても大丈夫なのか？

疑問と月華への不審感がぐるぐると生まれ、頭の中をまわり続ける。荷物を広げようとした俺に月華が声をかけた。

「荷物はまだ広げるなよ、明日ユウに掃除させるから」

・・・お前がするんじゃないのかよ！！

この日の俺はあふれる疑問のせいで満足に眠れなかった。

◆◇◆◇◆◇◆

「襲われた、か。」

そう月華は口にして彼は彼の仕事場である部屋にいた。起動はしているもののそのパソコンが仕事に使われていないのは見ればわかる。月華が考えていたのはユウのことでも、襲ってきたという連中のことでもなく悠の事だった。

襲われた、といっていた日の昼ごろからなんとなくだが様子がおかしい。なかなか気付けないだろうが時折ふっと悩むような表情をしていた。

「おそらく襲われたことからくる不安だと思ったから、予定していたとりあえずの安全策は講じたが、相手の正体がわからない以上一時的なものでしかないがな。」

本当は襲われたというその日のうちにこの家に住まわせるつもりだったのだが、言い忘れていたようだ。

（・・・まぁ、悠に被害は出ていないのだし大丈夫だろう。）

そして月華は振り向いた。人の気配を感じたから、ではない。

わずかに音がしたから。
振り向いた先にいたのは、一人の少女。どうやって入ってきたのか、どうやって閉まっているはずの扉を音もたてずに開けたのか、という疑問はこの少女のに対しては無意味だということはよくわかっている。少女は無表情な表情を変えずに話題を切り出した。

「仕事を、頼みたい。」

それがどんな仕事でも、月華に拒否権は無い。
月華は仕事を頼まれた。

## 第七話（後書き）

「評価とお気に入り登録ありがとうございます！！
作者からお金をもらってきたので盛大にクラッカーでも鳴らそうか？」
『ご近所に迷惑よ』
「ぶー」
『今回の最後の方、月華だけのシーンは本当は書かれないはずだったのよね』
「話が唐突に変わるね。まぁ、いいけど。
実際はもっとあとに書くつもりだったんだよね」
『ええ、でも、作者としては書きたいシーンだったんだけど頭の中で考えてみるとどのタイミングで入れるべきかわからなくなったそうよ』
「で、急遽書いた、ということだね」
『ろくにプロットも組んでないのに時間軸とかの問題は大丈夫なのかしら？』
「その辺は作者特有の楽観視のもと大丈夫ってことになってるみたい」
『では、今回はこの辺で。
この小説では皆さんからの感想、指摘、評価など幅広くお待ちしております
メッセージもお待ちしております』
「キャラへの質問もね」
『あと、お気に入り登録していただいた方のページへ行く方法もよ。
これに関してはなかったら無い、と作者に教えてやってください。』

## 第八話（前書き）

暁の帳のもと無知の者は意識の闇に沈み

宵闇の中、愚者はただ夢の中を踊る

# 第八話

―悠―

眠れなかった、とは言っても多少は寝ていたらしい。最後に時計を見たときは確か四時ごろだったと記憶しているが、今は七時になっていた。多少、というかこれは結構寝ていたことになるのか？

「神崎さん、起きてますか？」

ユウが部屋をノックして俺に声をかけることでぼんやりとした俺の意識は起こされた。一気に鮮明になる意識とそれまでぼんやりとしていた思考が再び回転を始める。そうだ、月華に、聞かないといけないと思ったんだ。本当にユウを守る気があるのかと。

「起きた・・・。」

朝食ができている、ということを言って下に降りていくユウを見送ってから悠は着替えて下へむかった。もちろん今日は仕事があるのでスーツを着る。仕事に行くのが憂鬱で、こういうときばかりは引きこもり、というか在宅業の月華のやつがうらやましくなる。

昔、就職してすぐのころにそんなことを月華の前でぼやいたらなぜかすぐ近くに置かれていた本の角が飛んできた。何でも、在宅には在宅での悩みがあるそうだ。ある日突然、仕事がメールで送られてきたりとかするらしい、それもそれで非常に嫌だと思う。確かあの時だったな、月華の性格が変な方向に曲がったと確信したのは。

そんなことより、朝ごはんは目玉焼き、パン、牛乳に、野菜といった洋風なものだ。月華が朝にあまりたくさん食べないので、お手軽かつ少ない量のを好んでいるので、朝ごはんは洋風なものが多く

なるらしい。俺としては朝は米が食べたいのだが無理やりとはいえ、世話になっている身なのでわがままは言わないことにする。朝らしくさわやかな空気と和やかな雰囲気に包まれている。

「ユウ、今日はお前の服を買いに行くぞ。」
「え、月華は仕事しなくていいんですか？」
「別に期限が差し迫っているわけじゃないし、一日二日休んだところで問題はない。それに、お前に俺のお古をずっと着せている訳にはいかないしな」

それを聞いたユウはさすが女の子というかうれしそうに笑っていた。
女の子（ユウ）とお買い物か・・・。別にうらやましくはないが、一緒に行きたい。会社さえなければな・・・。

「神崎さんは今日はお仕事ですよね！！」
「ああ、うん。」
「じゃあ、神崎さんが帰ってきたら買ってもらったお洋服を見せてあげます。」

まるで太陽のような、という形容詞がぴったりとあてはまるような明るい笑顔を見ながら俺はとても癒されていた。ああ、なんかこの笑顔に癒されてるよ、俺。疲れてるのかなぁ？月華は俺に対して冷たいし、最近は残業も多いし・・・。
ふと、妹がいればこんな感じだっただろうかと、ある日突然いなくなってしまった妹のことを思う。妹と母親が消えたあの日、お金を稼いでくれる母親よりも妹がいなくなったことの方にショックをうけていたことを思い出し苦笑する。あのころ、自分にとっては妹は守るべき存在だったから、守ることができなかったことに対して大きなショックを受けていた覚えがある。若かったなぁ、俺。その

苦笑を、楽しみにしている、という意思だと取ったのか、ユウはまた笑う。

「神崎さんのお荷物はまだ二階ですか？なんだったらとってきますよ？」

「じゃあ、お願いしようかな。黒いバックだしすぐにわかると思うよ」

「わかりました！！」

ユウが二階へと行くためにリビングの扉を開けて、出て、閉めた。それを見送った月華が言ってきた。

「お前、ユウがいる時といない時じゃあキャラというかしゃべり方がが違ってないか？」

「そうか？どっちも一緒だと思うが。」

「妹のことでも思い出していたのか？」

態度が違うってのは納得できる。だって、月華に対してよりもユウに対してのほうがやわらかいってのは分かる。てか月華にやさしくする光景が思い浮かばないぞ？

それよりも、ついさっき考えていたことを出されて動揺したのを気付かれたのかニヤニヤと笑う月華が追い討ちをかけようとしているのが分かる。だから俺は、心の準備を整えた。よし、どんな言葉が来ても俺は耐え切ってみせるぜ！！

そう、心の防壁を作り上げたのだが――――。

「たとえあいつがお前の妹だったとしてもだ、あいつ自身は何も覚えてないんだから悲しいよなぁ。」

「ぐっ。」

意外なところをついてこられてしまった。あまりにも意外だったため、口に入れた牛乳を粗相してしまいそうになった。正直、「お前の妹じゃないだろ」、やら「血のつながりがあればよかったな」とかそういういやみを言われると思っていた。まさか、こんな切り口があったとは・・・。

俺の心についた傷には気付かずに（あるいは、無視しやがって）俺に何かを投げてきた。思わず避けてしまったが、月華の視線が痛いぜ。てか、月華が物を投げてきたらまず、避ける、これ常識。

「ああ、そうだ、これを渡しておく。」

床に落ちてしまったそれを拾ってみると、長い紐の付いた小さな袋だった。神社などで売っているお守りのようなものだ。というかそれとしか思えないが”安全祈願”やら”交通安全”といった文字が書かれていない。つついてみる。

返事がない、ただの布袋のようだ・・・。

「これを、どうしろと？」

「何かあっても、絶対に肌身離さず持ち歩け。」

訳がわからん。しげしげと眺め、ためしに袋を開けてみようとするがどうやってもあきそうになく、下手すると布の方を破ってしまいそうだ。もらったものについて何かきこうとしたところで、ユウが帰ってきた。手には悠のバック。

「ほら、ユウがきたぞ、時間は大丈夫か？」

「ん、今から出ればちょうどかな？」

「そうですか、それじゃあ、気をつけて行ってきてください！！」

ユウに手を振られて家を出た。珍しく、家に帰るのが楽しみだと

思った日だった。

「あ、しまった。」

ユウの笑顔に癒されていて、月華に聞くのを忘れてしまった。まぁ、ユウの前でするような話ではないし、今日の夜でもいいだろう。

◆◇◆◇◆◇◆

「さてと、ユウ。」

「何でしょう、月華。」

「行きたいところがあるなら自分で調べておけ、パソコンの使い方くらいは・・・。」

「わかりますよ?月華に一通り教えてもらいましたし。」

「なら、ノートをひとつ貸してやるからさっさと調べておけ。九時三十分頃には出るからそれまでにな、お金のことは心配しなくていい。」

「わかりました!!」

悠を見送ったあと、二人はこんな会話をしながら家の中に戻って行った。

## 第八話（後書き）

『さてと、今回は作者が挫折した話よ』
「まさか、小説はこれで終了っていう話？」
『それは違うわ。でもね、お気に入り登録していただいた方のページに行きたいって作者が言ってたじゃない』
「うんうん」
『そして最近”この小説を読んでる人はこんなのをお気に入りに登録しています”っていう機能ができたじゃない。それを見た作者は”○○ｕｓｅｒ”のところをクリックしたらお気に入り登録者のページにいけると思ってたのよ』
「実際は、小説の目次ページに飛ぶんだけどね。で、さすがにあきらめたと？」
『ええ、作者の中ではもう方法がない、ということになってしまったわ。読者様からはメッセージで否定のものはきてないのだけれどねぇ』
「意外と早かったね」
『私は遅かったと思うわ』
「ということで、今回はここまで
この作品では皆さんからの感想、指摘、評価、メッセージなど何でもお待ちしております。キャラへの質問も、読者様が抱いたのであれば送ってくださって構いません。それでは次回もお楽しみに」

## 第九話（前書き）

鳥は熟した果物しか食べないらしい

だから常に木の周りを飛び回り監視している

# 第九話

―ユウ―

「ふぅ。」

トイレに入って一息ついた私は今日の今までを思い返す。買ったばかりの新品の服を着た私を月華はとてもかわいい、と言ってくれた。それに、月華が横にいないときは男の人たちがナンパしてくれました。断ったし、月華がちょうどきてくれて何も起きなかったけど、あの時の私は正直自分がかわいいっていう保証がもらえたみたいでうれしかった。ハンカチで手を拭いて鏡に映った自分の姿をもう一度確かめる。

ノースリーブの白のブラウスに黒のジャケット、アクセントのようにつけた赤のネクタイを金のネクタイピンで留めてある。赤と黒のチェックの入ったミニスカートはかなり気に入っていたりする。ブーツのつま先を眺めながら考えたのは月華に持ってもらっている買い物の数々。

さすがに、ちょっと買ってもらい過ぎたかなぁ・・・。

◆◇◆◇◆◇◆

ユウが物思いにふけっていたりするそのころ、建物の一階で。

（早く戻って来い、ユウ！！）

月華はかなり本気で困惑していた。大学生時代になってから、友人たちからはかっこいいと言われていたし、何度か告白もされていた（全部断ったが）ので自分の容姿には一応、それなりの自覚があ

るつもりでは、ある。のだが、

「お一人ですか？」

「よかったら一緒に来ませんか？」

「一緒に写真を取らせてもらってもいいですか？」

学校をサボったのか学生と見える少女達が月華の前に群がっていた。町を歩く時からちらちらと視線は感じていたがユウがいなくなったとたんこれか、と思う。正確にはユウがトイレに行って、それを待っている間に通りかかった彼女達に囲まれてしまったのだ。連れがいるから、とあきらめていた連中もいるだろうが、連れであるユウがいない、今の月華は格好の獲物なのだろう。

正直なところ、ユウがいなければ、彼はすぐにでもこの場所から移動していただろう。

ため息をつきそうになったのを目の前にいる彼女たちに失礼だと思い、それを抑えながら足元を見る。月華の足元にはいくつかのというか両手に余るほどの紙袋（店の名前は女物の店が圧倒的に多い）があるのだが彼女達の眼中にそれはないようだ。

「月華！！お待たせしました。」

やっときたか、というような、ほっとした顔をして紙袋を持ち上げる。ユウがいるであろう方向を確認し、月華は紙袋を持って無理やり彼女達の包囲網から抜ける。ユウが完全にこっちにくるのを待たずに、ユウとすれ違うようにして歩く。それを見たユウは慌てて月華を追いかけた。あとに残ったのは呆然とした少女達だけだった。

◆◇◆◇◆◇◆

―ユウ―

月華のジーパンにTシャツ、皮のジャケットというラフな格好がとてもよく似合っていた。先ほどの女の子達が月華に近づこうとした気持ちは、まぁ、分からないでもないんですけど・・・。出てきた言葉は待っていてくれたことへのお礼ではなく、非難の言葉だった。

「ひどいです、月華。」
「なにがだ？」

とてもかわいい、私なんて見劣りしてしまうような、私と同じくらいの年齢の女の子に囲まれていた月華。正直、私は月華に声をかけるのをためらうくらいに彼女達の熱気はすごかった。そんな月華は私の声を聞いたらこっちにきてくれたのにそのまま通り過ぎてしまうなんて・・・。それをぶつけると月華はすまなそうな、気まずそうな顔をして言った。

「すまん、どうしても彼女達から離れたくってな・・・。」
「ものすごくかわいい人たちだったじゃないですか。」
「それは、分かっているんだが、な。ああいうのには慣れてないんだよ・・・。」

私は思わず噴き出した。そのあとすぐに失礼だと思ったので必死に笑いをこらえた。月華は何でもできそうな、完璧な感じがしていたのに、そんな弱点（？）があるなんて思ってもみなかった。

まだ少し早いけれど、今から、他のお店に入るとなると結構時間がかかるので、昼ご飯にすることにした。今日は私の後を月華が追う、というような感じで、よほどのことがない限り、月華は私の行くところや買うものに何の文句も言わない。逆に不安になってきていたりするのは、秘密です。

しばらく歩くと私はお目当ての店を見つける。

「月華、あそこでお昼にしませんか？」

ちょっと前にテレビでやっていたお店、レグザ。イタリアンのレストランで、パスタと言うものがおいしいそうで、私としてはぜひともボンゴレのパスタというのを食べてみたかった。それに、ピザとか。ジェラートというものは、まさに絶品だとか。涎は・・・出てませんね。月華は二つ返事で了承してくれて、私たちはまだあまりこんでいない店へと入っていった。

◆◇◆◇◆◇◆

そんな二人を監視している男が複数、その周辺にはいた。そんななかの一人が持っている通信機に連絡が入る。その一人の男は通信を受け相手に対応する。

『お嬢様は何処にいらはる？』

「いま、男と二人でレグザへ入っていきました。」

『人目についてはあまり手が出せんませんなぁ。ま、今日は確認だけが目当てやから、気にしてはおりませんがな。』

「監視は・・・。」

『続けておいてや。あと、一緒にいるとかいう男の写真も取ってきておいてや。後で調べようや。』

「はっ・・・。」

相手は特徴のある言葉をしゃべり通信を入れてきたときのように唐突に通信を切っていった。男も通信を切り、笑顔で男と話す少女の監視に戻る。自分の上司は一体なにをしようというのだろうか、そしてあの少女は一体なんだと言うのだろうか。どう見てもただの、

非力な少女にしか見えないというのに。そう思った彼は、そのすぐ後に自分が気にしても仕方がないことだ、何より知らないほうが身のためだと思い、今考えたことを忘れることにした。

自分の上司と、その直属だと言う気味の悪い集団のこととその集団に逆らった者たちの末路を頭の隅にとどめながら・・・。

彼らはけして手を出さない。出してはいけないと上司に厳命されているのだから。自らの命を繋ぎとめるため、彼らは与えられた任務を遂行した。

## 第九話（後書き）

「前書きのネタがなくなってきたようです」
『もともと第三話だったかしら？で、急にやりたくなったことだし、作者自身も足りなくなるとは思ってたみたいだけど・・・』
「早すぎ」
『でも、前回の前書きはそれなりにお気に入りみたいよ？』
「作者は似たような言葉をというか似たような韻のふみかたしてる文章が大好きだからねー」
『でも、自分でそういうのを書けているか自信がないとも言っていたわね』
「自信がなきゃ書かなきゃいいのに」
『ある意味この小説そのものを否定するような発言ね・・・』
「禁句、かな？」
『作者も自覚してるし言わない方がいいんじゃないかしら？』
「うーん難しいね。
というわけで今回はここまで！！」
『この作品では皆さんの評価、感想、メッセージ、指摘、質問、お気に入り登録など幅広く構えてお待ちしております』
「作者のやる気のためにもぜひぜひお願いします」
『やる気といえば、前回の投稿後の１時間くらいでＰＶが１００超えててびっくりしてたわね』
「あれはかなりのやる気になったって言ってたよ」
『でも、投稿は日付の変わるぎりぎりなのね・・・』
「それこそ禁句じゃないの？」
『視点が変わったときは〇〇視点って書くべきかしら？
ぜひともアドバイスお願いします』

## 第十話（前書き）

火が煌々と燃える

人は、火の粉がその身に降りかからない限りその火を消そうとはしないだろう

# 第十話

―悠―

そんな話を聞いた俺は食べていた夜ご飯（月華作だ）を吹きそうになったのを何とか飲み込んでから大爆笑した。ちなみにここには月華はいない。だいたい、いたらこんな風に笑って入られない。ユウが「聞いてください、神崎さん。月華には秘密にしといてくださいね？」と月華はいないのにわざわざ小声で言ってくるので興味を持って聞いてみたのだ。おそらくユウも、月華がいないから切り出したんだと思う。

聞いてみると、なるほど確かに、こんな話はあいつの前ではできないだろう。あいつは人に弱みや秘密を知られるのが大嫌いだからな。

「わはははははは！！そ、それ見たかった！！ユウ、写真ないか？」

「神崎さん、そんなに笑っちゃ失礼ですってば！！それに・・・。」

ユウが笑い声を抑えるように言う言葉も聞こえないほどの大声で笑い転げる俺にコップが飛んだ。

ごいんっ。

「後ろに、神崎さんが・・・って言おうと思ったんですけど・・・。」

変な音がして笑い声を止められた。コップが床を転がり、俺は今度は笑いではなく痛みに震える。ていうか、ユウ、言うのが遅いよ。

「月華、何をするんですか！！」
「気がすんだか？写真がほしいんならこの辺の監視カメラにハッキングをかけて画像データを手に入れてやろうか？」
「・・・。」

さすがにやりすぎだと思ったのかユウが月華に怒るが、あいつは聞こえなかったふりをしたようだ。そして、あいつの犯罪宣言ともとれる発言を俺はきかなかったことにして（ユウも同じような反応をした）恨みがましい目で月華を見る。そんなあいつは俺を見下すような目で見てくる。
くっそう、なんで面白いことを笑っちゃいかんのだ。それは月華にとってある意味弱みだったからだ、というのは分かっていても面白いことは面白いので腹が立たないといえば嘘になる。そして今の話を何処から聞いていた？

「人のことを笑うからだ。」
「だからって、だからって人の頭にコップを投げることはないと思うんだが・・・。」
「安心しろ、合成樹脂製で丈夫だから割れて破片が刺さることはないぞ。」
「論点が違うと思いますが・・・？」

月華は、持ってきた飲み物（お酒だ）をもってソファに腰掛けた。今日の話はユウから聞くだけのものではない。というか、あまり月華の話は聞きたくない。月華からの話は今回に限っていえば十中八九よくない話だと断言できるからだ。理由は、俺の勘だ。異論は認めない。

「尾行はあったがな、手は出してこなかったはずだ。。」
「尾行されてたんですか！？」

「俺は尾行されていることに気付けるお前がすごいとしか思えないよ。」

月華は話を続ける。俺の前にコップを置いて酒を俺にもくれた。ありがたいが、先ほどこのコップが俺の頭に当たったのだと思うと、なんとなく寂しいものがある気がするのは、気のせいだろうか。

「おそらく昼ごはんを食べるのにレグザに入ったころには付いていたはずだ。そのあとはずっとこの家まで、だな。」

あれ？この家まで？とりあえずおいしく酒を（なぜかいい酒がこの家には大量にあったりする）いただいていた俺はその事実であろうことを何度も頭の中で反芻して月華に尋ねた。

「それって、やつらはこの家を知っているということじゃないのか？」

「そうなるな。」

「それは、まずくないですか？」

「まずい、が、ユウにもう一度聞きたい。」

「何でしょう？」

「本当に、あいつらとは面識がないんだな。」

「ないはずですよ？あったとしてもあまりいい思い出ではない気がします。」

「それなら、問題ないな。」

なにが問題ないのかは何度たずねても教えてくれないが、月華が何か変なことをした時によく言う？昔？というのが絡んでいるのは間違いないだろう。一体、こいつの？昔？に何があったのだろうか。いや、違うな・・・。

こいつは？昔？に？何を？していたんだ？

何があった（何をした）のかは何度も言うがまったく知らない。あった（した）としたら俺とあまり縁のない中学、高校の時だと思っているのだが、その時の友人も何も知らないみたいだし。月華も何も言わないので、興味深々な俺だけれども知ることができないのであった。そんな俺の思いも何処吹く風という感じの月華は、俺の思いをまったく知らないだろうユウと楽しそうに話していた。

「明日は悠とお前の部屋の掃除でもするか、ユウ。」
「お掃除ですか？ちゃんとできるかわかりませんけど・・・。」
「いや、俺も見てるから大丈夫だ。」
「神崎さんのお荷物はどうしたらいいでしょうか？」
「今日中にまとめさせておくし、明日になったら俺の部屋に移動させておくから大丈夫だ。というより、掃除するつもりでいたから荷物なんて広げてないよな？」

最後の方は俺への確認だったようで、月華は俺を見ながら言った。俺の意思は無視ですかー？ていうか掃除って確か今日するって言ってませんでしたー？そんな考えは言葉にせず頷いておく。楽しそうに話す二人に俺は声を挟めずに一人でいろいろと悩み、考えていた。

例えば、尾行されていたこととかな。

月華はともかく、ユウが楽観的でいられる理由がよく分からない。月華はともかくって言うのは、あいつはほっといても何とかできそうな、というかしてしまいそうな感じがするからなんだけど。どうにかなった結果がいい方向になるのかはわからないが。

だって、こいつ大学の時にストーカーの相談されて、そいつのこと調べて社会的に抹殺したんだよ？世間的によくても、相談した彼女はさすがにやりすぎだと思ったらしく、しばらくふさいでたよ。俺が、アフターケアしたんだけどな・・・。

まぁ、そんな例があるから、月華は問題ないと思う。
それよりもユウの方だ。黒スーツとであった時はあんなに怯えていたし、狙われているのがユウなのは明白な事実だと思う。でも、ユウの態度はまるでどうにかなることがわかっているかのようなもので、無理しているようなものではないように見える。
まるで、誰かが助けに来てくれると信じているような――――。そう思って、俺はその考えを捨てる。
仮に、誰かがユウを助けるために探していたとしても、ユウはそのことを覚えていないのだから。

## 第十話（後書き）

「コノ小説ノユニークアクセスガ１０９９ニナッタ。
作者ノテンションガ上ガッタ」
『突然何を言い出すのよ。そしてなぜ片言？読みにくいわよ』
「作者の気分がまさにこんな感じらしいよ。中途半端なところは作者らしいね」
『せめて１１００にすればいいのに』
「それが１０９９だからこその作者クオリティだって」
『この中途半端さはむしろパッシブスキルだと思うわ』
「むしろ１０００でやろうと思ってたことなのに気付いたらここまできてたんだって。ちなみに前回更新時には１０００になってたはずだよ？」
『・・・。まぁ、いいわ。で、今回はなぜか月曜更新だったわね』
「うん。活動報告って言っても見てくれてる人がいるのかはわかんないけどそこで作者が書いたように作者、出かけちゃったからねー。おまけに作者は携帯からは更新しない主義だから」
『でも、更新しない、ということも考えていたのよね？』
「うん、でもせっかくだからって」
『相変わらずわけのわからない思考回路をしている作者だけど今回はここまでね。
この作品では、評価、感想、指摘、アドバイスなど何でもお待ちしておりますので気兼ねなくどうぞ』
「むしろ作者の場合だとどんなものでもなにかもらったらものすごい勢いでテンションあげそうだね」
『あとは、誤字脱字ね。作者は結構厳重にチェックしてるみたいだけどもしも発見したら教えていただきたいわ』

## 第十一話（前書き）

右左上下

ここはどこかでそこもどこか

蛇は何処へでも何処へでも

# 第十一話

某所。というか、学校。

学校の建物の中のとある一室。そこにいたのはその学校の制服を着た男子と女子の二人組みだった。部屋の中の雰囲気は重苦しいとはいかないまでも、けして軽いものではないと断言できる。沈黙の中、切り出したのは男子の方だった。

「噂は聞いているよ。」

「ろくな噂じゃないだろうけどね。で、何かわかったの？？蛇？。」

「一部じゃあ有名だよ？お前が一本とられたっていうのは。」

「うるさい。てか、そんなに有名なの？」

「それはもう、その話で持ちきりだというくらいにな。」

女子、いつぞやの少女は男子に向かってそうたずねた。蛇と呼ばれた男子はくつくつとわらうと資料を差し出した。データの入ったチップ。それを自身のマシンに入れながら少女は尋ねた。

「で、彼らは何者？」

「単純に言うと”カンパニー”によって被害を受けた人たちの会”だ。正式な名前は存在しているだろうがそういう組織がいくつもあるからどれかは特定できない。」

「そう。」

少女はロードされたデータを見ながら返事をする。

「復讐は珍しいことじゃないよ。」

「そう、それ自体は珍しくないが、だが？紅（クリムゾン）？よ。お前にその矛先

が向くのはとても珍しいことだと、私は思うがな」
「確かに。」
「そして、他の社員に目もくれずあの娘に攻撃を仕掛けたのはやつらが初めてじゃないか？」
「そうだね。」

少女が画面から目を離して少年を見る。目が言外に「何が言いたい」といっているが、少年はそれに笑いで答えた。

「なに、不思議だと思ったのだよ。お前は世間にはその存在も、顔もあまり知られていない。
カンパニーに恨みがあるならお前よりもはるかに有名なベールやヴィオレットがいるし。わざわざ”色持ち”に手を出さなくとも下っ端だっている。なぜ、お前とあの娘だったのか、とね。」
「スズに関しては、まぁ、何度かあったけど。ボクに関しては、知らないよ。・・・ところで、蛇。」
「なんだい？クリムゾン。」

少女は画面を指差して少年の意識をそちらへと向けさせる。そこにあるのはどこかの組織の資料だ。

「情報があいまいな上に少なすぎるんだけど・・・。ボクが依頼してからもう一週間もたってるんだよ？」

少女の呆れたような指摘に少年は偉そう、また、少し起こりながら少女に答える。

「それは仕方がない。やつらの本拠地はおそらく私の管轄外だ。だいたい、その資料自体は依頼から二日後には完成していた。」
「取りに来なかったボクが悪いってことですね、すいません。それ

より、管轄外ということは・・・外か。」
「あの娘は人為的に作られた穴に落ちたのだろう？ならばその穴の先にやつらの本拠地があるとみて間違いないだろう。」

ベール、ヴィオレット、色持ち、外に穴。彼らの会話には不可解なところがいくつもあるがそれをいぶかしむ輩はこの空間にはいない。彼らはさらに会話を続ける。

「やつらは他の同じような組織に比べて徹底的に背景が見えない。むしろ、表に、というかこっちに来たのすら今回が初めてだろうな。私の情報にまったくなかったくらいだ。」

少年は苦々しげにいう。まるで、自分が知らなかったことがこの世にあったことを嫌悪しているかのような口ぶりだ。それを受けた少女も知らなかった、というところに同意しつつも資料を何度も確認している。

「おっけ、資料はもらっていくよ。」
「ああ。」
「現場の解析の方も終わってるし、穴の先は月華のいるところだった。すでに月華に情報を集めるように言ってあるから、あとは情報を教えてもらうだけ。あとはやり残しというか手付かずになっている仕事を片付けたらすぐに行くよ。」
「だがツキカとやらに渡したのは私に渡したものと同じものだろう？あの、面をかぶった人間の写真一枚だけで特定するのは不可能に近いと思うが？」
「嫌なところをついてくるね。」

実際、それしかなかったのだからしょうがないが、顔の分からない写真に名前の分からない敵。その写真だって、この辺の監視シス

テムの管理元に頼んで譲ってもらっているのだ。それに、相手の声も聞いていないのだから、そんな写真一枚で情報が集まっているとは思えないのだが・・・。

「まぁ、敵がうまい具合に月華に接触してると思うよ？なんたって月華だし。」

「それはお前がいつも言っている『そういうことに巻き込まれやすい体質』のことか？」

「そうだよ。スズ自身が月華のそばにいるとは思ってないけど、おそらく月華は巻き込まれてるよ。」

それだけいうと少女は立ち上がって部屋を出て行こうとするがそれを少年が呼び止めた。

「ではクリムゾン、支払いをしてもらおうか。」

少女が脱力する。

「こんな時でもお金ですか・・・。こういうときはもっとこう、これからの仕事を応援するとかさー。」

「お金は大事だぞ。なんと言っても生きていくために必要なものだからな。」

ほれ、と手のひらを少女に向けて催促してくる少年に、少女は札束を投げ渡した。金を投げるな、と言いながら、それを確認した少年は少女に向かって一言、こう言った。

「せめて生きて帰って来い、お前は大切な金づるだからな。」

それに対して少女は不敵に笑い、

「誰に向かっていってるの？ボクは、？クリムゾン？だよ？」

といって部屋から出て行った。

学校は授業中のようで教室には黒板を写しているのか、生徒が必死にノートを取っている姿がある。制服を着た少女は足を速めてその場から去っていった。

## 第十一話（後書き）

『もうすぐユニークアクセスが５００になるので作者が何かをしたいそうです』
「何かって何？」
『さぁ？』
「・・・まぁ、それは横においとこうか。で、作者の話だけど、今回書いてて楽しいなぁと思ったのがこの”蛇”なんだって」
『別の話では登場予定なだけで、まだ書いてないからこのキャラを書けてよかったと言っていたわね』
「今回って言うのは今回の更新でっていう意味」
『さすがに全話通して蛇がお気に入りっていうのはメインキャラが泣いてしまいそうね・・・』
「作者曰く「どいつもこいつも神経図太い性格だから大丈夫」だって」
『確かに作者は涙もろいキャラというか精神が弱いキャラ作るのは嫌いだけどそこまで言ってもいいのかしら？』
「ちなみに作者は神経もろいキャラが嫌いなわけではありませんのであしからず」
『今回はこの辺にしておきましょうか。
この小説では皆さんからの感想、評価、お気に入り登録をお待ちしております。
あと、話の展開に希望がありましたら言ってください。作者がその内容を確認して、可能ならその展開というかそのシーンを入れた話を書くと思いますので』
「あと、ユニーク５００突破記念で何かしてほしいことがあったらその希望もどうぞ」
『もし、誰もしてほしいことがなかったらどうなるのかしら？』
「小説の方は作者が考えたネタで突き進むし、５００突破記念の方

は何もしないかも」

## 第十二話（前書き）

秘密を守る一番簡単な方法は

秘密を知る人間がみんなみんないなくなってしまうことです

# 第十二話

さらに某所。
彼はプロだ。
潜入作業はお手の物。
任されれば長期任務として裏切りまで働いたりする今日の彼は、とある企業の集会に参加していた。
任務内容はとある人物について調べることで、この集会には他にも何人かの仲間と同業者が参加しているはずだ。

とある任務とは、この企業のこと、そしてこの企業の”とある部門”とそれを任されている女性についてだ。
もともとこの企業の社員の一部には出身も経歴も不明なのがいる。
彼らの経歴は調べることができない訳ではない。
存在していないのだ。
何度も何度も専門の人間が、権力を行使して徹底的に調べ上げても結論はひとつのことにたどり着くのだ。
それはまるで、ある日突然現れた、というくらいに唐突な経歴の持ち主ばかりなのだ。
そして、それらの人間すべてが”とある部門”に所属している。
そして、彼らを束ねる人間（以下彼女）、彼女の名はここではあえて伏せておこう。
彼によって情報が漏れるのは好ましくない。
そして彼女も、彼らと同じくある日突然現れたような経歴の持ち主である。

時間だ――――。

彼は腕時計を見て前の方にある壇上に目を向ける。

こっ、こっ、こっとハイヒールの音が響く。
エキゾチックな黒髪を背中まで伸ばした彼女は口を開いた。
その見た目からおそらく日本人だろうという予測ができる彼女の書類上の戸籍は確かに日本のものだった。

「ようこそ、おこしやす」

そして彼女は日本語でしゃべりだす。
英語を母語とする彼は一瞬戸惑ったものの困ることはない。
彼はプロなのだ。
日本語も理解することができる。
ただ、その日本語は少々癖のあるものだったが。

「皆さん、カンパニーというものをご存知ですか？
知らない方は挙手してくださいな」

イントネーションが彼が昔いったことのあるキョートという場所に近い。
周りが手を上げないので彼も回りに合わせて手を上げない。

「でしょうなぁ。
ここにはカンパニーを知らんものはおらんはずですなぁ。では、話を続けさせていただきます。
うちたちはカンパニーに、主にクリムゾンに復讐するために集まった人たちで間違いないですな？」

聞きなれない名詞が彼の耳に届き、彼は困惑するが周りはそうではなかったようだ。
その言葉を受けていっせいに雄たけびが、賛同の拍手とともに上がる。

「そして、うちたちは今回、やつらに一泡吹かせてやりました」
壇上の右のスクリーンに一人の少女が投影される。
髪の毛が茶髪なためなんともいえないが日本人だろうか？
「彼女の名前はスズ・カンパニー。
カンパニー秘蔵のお嬢様、といったところでしょうなぁ」
スズ、カンパニーと彼は口にして記憶する。
メモは不自然なので、自分の記憶だけが頼りとなる。
「うちたちでうまい具合に穴を開けてこちらに落として。
記憶喪失になっていたところまではよかったんですけどなぁ。
何の因果かお嬢様にくっついた邪魔者が二匹」
スクリーンの映像が切り替わる。
「一人がカンザキ・ハルカ」
黒い髪を短く刈り込んだサラリーマンの写真が写さる。
「もう一人がトガリ・ツキカ」
映像が切り替わり、私服をきた同じく黒のぼさっとした髪をひとつにくくっている青年の写真に切り替わる。
「現在はトガリの家にいることがわかっておるんですけどなにやら怪しげな結界が張ってありましてなぁ。
トガリ自身も何がしかの術を纏っておりますし、お嬢様に変に手を

出して思い出されてもうちらが困るだけやし、なので、カンザキに手を出そうと思うてもカンザキにも術が纏わりついておりまして、現状、まったく手が出せへんのです」

ここではそんな術使える人はみんなここに降りますのになぁ。
はぁ、とそう言ってため息をつく彼女。
彼の頭は冷静に動いていた、動いていたものの気は動転していた。
トガリ、カンザキ、カンパニー、クリムゾン、術、結界。
はじめの方の名詞はまだいい、だが、術とは何のことだろうか。
確か東洋では悪しきものが入り込まないように結界というものを張るらしいがそれのことだろうか？
周りは納得したように見ているが彼は納得できない。
おそらく、彼の仲間も同様だっただろう。
そして彼女は話を続け、彼はできるだけ頭の中に情報を詰め込んだ。
他の仲間達も同じように覚えられるだけ覚えたはずだ。
あとは、この情報を持ち帰るだけ・・・。
そして、集会も終わりに近づいたころ。
彼女は締めの挨拶としてこう言った。

「それでは本日集まっていただいたスパイの皆様、ご足労様でした。
今回の集会の情報は漏れる心配はしとりません。
なぜなら誰がスパイかはわかっとるからです。
それでは、スパイの皆さん」

死んでくださいな。

その言葉を聞いた彼には驚愕に陥る時間は与えられなかった。
どうしてばれていたのかを考える時間も与えられなかった。
彼女が言った言葉をきちんと理解する時間も与えられなかった。
言葉を発する時間も、身を守る時間も与えられなかった。

彼の体が爆ぜる。
どこかでも、誰かの体が爆ぜる。
どこかでは真っ二つに切られ、誰かは首を落とされる。
彼らには痛みを感じる時間も、痛みを訴える時間も与えられなかった。
彼らは痛みを感じるころには全員が絶命していたのだから・・・。

「それにしても、分かっておったとは言え、ずいぶんおりましたなぁ」

死体を眺めて彼女がもらす。

「ボス、こいつらどうします？」
「社長に使うか聞いておくれや」

尋ねた部下に彼女はあっさりとそういった。
”使う”、という言葉にはいやな思いを抱かずにはいられないが
部下はそんなことを感じていないのかあっさりとそれを了承しどこかへ消えていった。
それを見届けた彼女は一枚の写真を見る。
スズ・カンパニーと呼ばれていた少女のものだ。

それを握りつぶして彼女はつぶやく。
そこにこめられたものはなんだったろうか・・・。

## 第十二話（後書き）

「作者がショックを受けました」
『連載を新しく始めた『一般人以上、勇者未満。ただしその力は勇者を超える』（以下勇者未満）があっという間にこの失踪の最高アクセス数をユニークが超えてしまったのよね』
「まさか、８０人を超える人が見てくれたとは・・・」
『感謝する一方で失踪の小説がかわいそうになったそうね』
「ま、それは作者の力量しだいでどうにでもなるんじゃない？」
『そうね。で、今回はおそらく黒幕が登場したわね』
「彼らの目的とは一体なんなんだろうね」
『私たちは知ってるけど何もいえないものね』
「ネタばれ禁止だもんね」
『でも、ほとんどの人にはスズ・カンパニーが誰のことかわかったんじゃないのかしら』
「きっとね」
『今回はここまでよ。
この作品では評価、感想、メッセージ、指摘その他なんでも受け付けております』
「ユニーク５００回突破記念の案も求めているよ」
『まぁ、なかったら何もしないのだけどね』
「それでは次回もお楽しみに！！」

## 第十三話（前書き）

傘をさして、手を引いている人

傘をさして、手を惹かれている私

雨がやんだとき、傘をどこかにおいてきてしまった

# 第十三話

「・・・起きましょう」

そう言って私はベッドからはいでる。
この日は、初めて雨を見ました。
初めて、と言っても私の記憶のある限りという意味だし、雨というのは何処でも少なからず降るものだから本当の意味では初めてではないのだろうけど、雨の音に不快感を覚えます。
まるで嫌なことが、雨の日に起きたような気がするのですが。
嫌なことが、雨の日に起きたのか。
雨の日が、嫌なことなのか。
それも、よくわからないですけど・・・。
今日見た夢も気分のいいものではなかったような気がします。
誰かを探していたような、誰かに探されていたような、誰かに探してもらったような。
誰かに会いたいような、誰かに逢いたいような、誰かに遇いたいような。
何もかもがよく分からなくて交じり合っていたような、混じりあっていたような、雑じりあっていたような、夢。
誰かに呼ばれた気がしたけど、あれは誰？
呼ばれていたのは、私？
どんどん考えが深いところへとむかっていきますが時計を見て、私は急いで一階へむかいました。

「おはようございます・・・」

リビングには月華だけがいて、神崎さんはもう、仕事に行ってしまったと教えてくれました。

私は時計を見てなるほど、と納得するここ最近、神崎さんが出かけていた時間よりも三十分ほど遅いです。
朝ご飯を食べてから掃除を始める、と月華が言うのを聞きながらご飯を食べます。
今日の朝は味噌汁に、ご飯、焼き魚という純和風ものらしい献立でした。
神崎さんの希望らしいです。
おいしくいただいて、ごちそうさま、と言うと月華はおそまつさま、と応えて片付けに入りました。
私は着替えに部屋へ戻ります。
そういえば私の部屋も掃除したい、かな？
月華にもらった部屋はそれなりの広さがあって、贅沢な感じがします。
今も感じる不快感を吹き飛ばすように私は頭を大きく振って月華が待つ神崎さんの部屋へと向かいました。
月華はよく分からない機械を持ち出して、待っていました。

「きたか。それじゃあ、はじめるぞ」
「はい！！」
「掃除機の使い方は？」
「わかりません！！」

どうやら月華の横にある機械は掃除機というものだそうです。

――――――――――――――――――――

元気に返事をしたユウに丁寧に掃除機の使い方を教える月華。

「あいにく今日は雨だから布団を干したりとかはできないが、なるべくきれいにするぞ」

「はい！！」
「まずは、そうだな。悠の荷物を俺の部屋に運ぶか」
「はい」

その日の午前中は神崎さんの部屋を、午後は私の部屋を掃除しました。
月華の部屋の掃除はいいのか、とたずねると仕事の物が広がっていたりするし、自分ですると言っていた。
確かに月華は午後からは月華自身の部屋の掃除をしていました。
私も手伝いました。
月華が普段は使わない部屋だから、と言っていただけに掃除が終わったあとの掃除機を確認すると結構なほこりがたまっていました。
掃除が終わって、私は月華と一緒にお茶を飲んでいます。

「月華にとって、雨の日とはどんな日ですか？」

何気なく、私の口をついて出た一言。

「そうだな、なんとなく憂鬱に、なるかな」

そういうことではありません。
私はその旨を伝え、言葉では言い表しにくいですが月華に質問の主旨を伝えました。
月華はどうやら分かってくれたようで、しばらく悩んで、答えてくれました。
どうしてそんなことを聞いたのか、と問われましたが答えられませんでした。
私もどうしてそんなことを聞いたのか分かりませんでしたから。

――――――――――――――――――――

帰ってきた神崎さんは私のことをほめて、頭をなでてくれました。

「子ども扱いしないでくださいよ」

「ああ、すまないな」

そう言って頭から手をどける神崎さん。

でも、何処となくこの会話が懐かしいような気がして何処でしたものだろう、と神崎さんを見ながらしばらく考えていました。

そして、月華の言ったことも。

そういえば、神崎さんにとって雨の日は大切なものを失くした日だそうです。

## 第十三話（後書き）

「今回はちょっと短め」
『もとが短いものね』
「紅月は投稿する時にもともと作ってあった短め（骨組み）の一話（以下単話）分に肉付けする形で改稿？してから投稿するね」
『それが今回のネタ？』
「そう。で、単話を作る時には、頭の中で考えたことを書いていくの。主に
・それまでの話の流れを汲みつつ、次の単話に展開できるようにする
・書きたいシーンの流れや組み入れる場所
・頭の中でくみ上げた単発のシーンを組み合わせる順番
を考えながら書いてるね」
『へぇ』
「改稿、投稿するときにも気をつけてることがあるけど、それはまた別の時にしようか」
『そうね。今回は他にもあるわね』
『「５００ＰＶありがとうございます」』
「やっと５００だねー」
『前回の投稿後に５００になって本当は月曜か火曜あたりに一人ひっそりと祝賀会でも開こうかと考えていたそうよ』
「うわ、なんて寂しいことを・・・」
『けっきょくそれは紅月が風邪を引いて潰れていたから流れたのよ。財布の都合もあったし』
「へぇ。というわけで、今回はここまでだね。
この作品では皆さんからの感想、指摘、アドバイス、評価、お気に入り登録などをお待ちしております。
そしてここで、紅月からのアンケートです。

Q、キャラ紹介ってほしいですか？

期限は一応ありません。いつか締め切るでしょうけど。
解答は感想、メッセージなど作者に伝わる方法なら何でも構いません。ではアンケートへの回答もお待ちしております」
『そういえば今回から作者のことを紅月って呼ばされてるけど、なぜ？』
「理由は活動報告で説明するって言ってた」

## 第十四話（前書き）

不思議の国へ迷い込んだ少女はただただ歩く

あのおうちは前に見たことがある気がするわ

ここの道を行くとウサギさんに会えるのかしら？

# 第十四話

ユウは一人で道を歩いていた。
そこは月華の近所で、彼女は散歩をしているのであった。
なぜこうなったのかというと、話は少しさかのぼることになる。

――――――――――――――――――――

今日の朝。

「それじゃあ、いってくる」

そう言って悠は家を出た。
この日も仕事である。
一方、月華は仕事があると言って部屋に引きこもってしまった。
どうやら、ちょっと前に請けた仕事を今日のうちに済ませておきたいのだそうだ。
そうなると

「暇ですね・・・」

一人することがないユウは必然的にこういうことになる。
というか、掃除は毎日する必要がなく（昨日やった）、朝食に使用した食器類も洗ってしまい、昼食は月華が作ってくれる（ユウもできないことはないが作ってくれるので）。
ちなみに現在は朝の十時。
やることがなくて暇なので月華に貸してもらったパソコンをいじってはいたものの、暇なのでテレビをつけたのだがあいにくと面白いものをやっていない。

突き詰めると

「暇です」

ということだ。
今度はそういいきると自分の部屋から目的のものを持ち出して月華の部屋へと向かう。
閉まっている扉をノックして月華の部屋に入る。

「失礼します」
「どうかしたか？」

ぱちぱちというキーボードの音がやみ、月華がユウの方を向いた。

「暇なんですよ。
なので、ちょっと散歩にでも行こうかなぁと思いまして」
「そうか」

月華に声をかけたのはなんとなくだ。
黙って出かけるのは気がひけたということもあるし、この家の主人である月華に外出の許可をもらおうと思ったのもある。
それにユウは一応ではあるが自分の立場を理解している。
得体の知れない連中に狙われている、という立場を。
一方の月華は返事をしてしまったもののすぐに許可を出すわけにはいかず悩んだ。
今、ユウだけを外に出すのは得策とはいえない。
ユウを追っている連中からの手出しはされていないが、かと言ってユウが一人で出かけるのをあっさりと認めるのもよくない気がする。
月華自身も仕事を優先したいので、ついていくことはできない。
かと言って、一日中暇だというのもかわいそうだと思うので、どう

にかして散歩に行かせてやろうと思う。
しばらく悩んだ末に月華はある方法を思いついた。

「そうだ」

というと月華は自分が耳にしているイヤーカフスをはずすとユウに自分にもっと近づくようにといった。
このイヤーカフス、銀でできており、中心から鎖が伸びていてその先に赤い石がついている。
その赤い石は炎のような鮮やかな色をしている。
月華の左耳についているものは同じデザインだが石の色は青色である。
そのイヤーカフスに何処となく既視感を覚えながらも月華に近づくユウ。
月華はユウの耳にそれをつけた。

「うん、なかなかに似合うな」
「え？え？私がつけてもいいんですか？」

動揺するユウをみて苦笑するように笑い、月華は携帯電話もユウに渡した。
携帯電話の簡単な使い方を教えようとするとユウはしげしげと携帯を眺めて言った。

「これの使い方なら分かると思いますよ？」

ためしに月華は今いる家に電話をかけるように言ってみるとユウは実際にカチカチとキーを押す。
すると月華の近くにおいてある電話がなる。
それを見た月華は記憶が戻ったのか、と聞いたがユウの回答は見た

ことがある気がしたというものだった。
でも、携帯という名前では呼んでなかったと思う、ユウはそうも言った。
それを聞いた月華は携帯のディスプレイに表示されている時間を確認した。
自分の財布からいくらか出して、ユウに渡すとユウはそれを準備しておいたバッグに入れた。

「それなら、今は十時三十分か。
なら、一時には一度帰ってこいよ」
「分かりました」

ということで今に至るわけだが。
今日は昨日の雨が嘘のようにきれいな青空が広がっている。
空を見上げて、深呼吸。
気持ちよさそうな笑顔を浮かべ、鼻歌を歌いながらまた歩き出す。
これと言って目的地があるわけではないのだが道の分岐に対しての足取りは迷うことなく確かなものだ。
しばらく歩いて、公園を通り過ぎる。
小学校の体育の授業だろうか？
子供達が広いところで駆け回っている。
さらに進み、途中でよったお店でアイスを買ったりして時間的にはそろそろ折り返しだろうか。
ユウの前には更地になったおよそ家一件分の土地があった。
その土地の横も、更地、というわけではなくきちんとした家が建っている。
そこでユウは足を止め、きょろきょろと辺りを見回し、首をかしげた。
何か考えているようだが何も思い浮かばなかったのか、来た道を戻っていった。

## 第十四話（後書き）

「えー、木曜日はすみませんでした！！」
『紅月のバカが追試の勉強をしていたので更新ができませんでした』
「でも、今日は二話更新ではありません！！」
『今度は別の科目の追試があるって言ってたわね』
「でも、今度の水曜か木曜にはきちんと更新します！！」
『さて、いつまでも紅月の話をしてないで、今回はどういう話をしようかしら？』
「ボクらについて、だって」
『もう、書くネタがないのかしら・・・』
「でも、ボクらってこの話に出る予定だし、別にいいんじゃないの？」
『私は出る予定はあっても、ねぇ』
「えふんえふん」
『・・・まぁ、いいわ』
「ボクらっていつ出れるんだろうね？」
『紅月曰く「ほぼ最終回的なところ、クライマックスのいいとこ取り」だそうよ』
「じゃあ、その活躍を心待ちにしますか。でも、これ、いつ最終回を迎えるの？」
『今年中は無理よ。まぁ、そんなに落ち込まないで、今回はここまでにしましょう？
この作品では皆様からのメッセージ、感想、評価、アドバイスなどお待ちしております』
「誤字などもあったら教えてください」
『あと、キャラ紹介が必要かというアンケートはいまだ続行中ですので、ぜひぜひ回答お願いします
方法は紅月に伝わるのであれば問いませんので』

## 第十五話（前書き）

道を振り返ることはできる

私の道は真っ赤に染まっていて、黒く澱んでいて・・・

あなたの道には何がありましたか？

# 第十五話

「あれ？お前こんな写真持っていたか？」

それはユウがきてから1ヶ月ほどたったときのことだった。
月華は仕事内容をメモにして、それを部屋においてあるホワイトボードに貼り付けてある。
当然メモ書きなのでそれは文章ばかりなのだが悠が指差したものだけは写真だったのだ。
映っているのは黒い髪をひとつに束ねた黒装束の女・・・だろうか？
仮面をつけておりその顔を見ることはできない。
俺はその写真をじっくりと見ていたが月華にひったくられた。

「じろじろ見るな」
「なんだよ。カノジョか？」
「そんなわけないだろう。それに・・・」
「なんだ？」
「ユウにも同じ事を聞かれた」

誰がこんな仮面つけたやつを彼女にするか、とぶつぶつ言いながら写真をホワイトボードに戻す月華
カノジョじゃないとなると誰だか気になるのが人の性、というものだろう。
気付くと俺は思ったことを口にしていた。

「じゃあ、誰だ？」
「知るか」
「おいおい、写真を持っているのに誰か知らないなんてそんなバカなことがあるわけないだろう？」

「実際そうなんだから仕方がないだろ」

月華曰く、仕事を頼まれたのだが、その仕事内容が「この写真の人物が誰かを特定し、その経歴を調べること」なんだそうだ。
写真だけ、しかも面をつけてて顔が分からないのに調べられるか、ということらしい。

「なぁ、月華。それって犯罪じゃないのか？」
「・・・」
「そこはぜひとも否定してほしいんだが」
「なら違うと言っておこうか」
「いまいち信用がないんだが」

この仕事に関しては特に期日はないものの依頼者がいつかまた来る、調査結果はその時に、と言っていたので早く終わらせたいらしいのだが今の状況ではそれは難しいらしい。
以前、だめもとで取り組んでみたらしいがやはり無理だったらしい。
これで、顔写真がきちんとしていれば問題はないそうなのだが・・・。

そして、この依頼者も、”昔”とやらの関係者らしい。

「本当に、お前は何をしたらこんな犯罪まがいな仕事を任されるようになるんだ？」
「昔、いろいろあったんだよ・・・」

そう言った月華の瞳は懐かしい過去をただ懐かしむような、または少しばかり悲しむようなものだったのが少しだけ印象的だった。
それにしても、また、”昔”。
ここまでくると何が何でも知りたくなってしまうじゃないか。
ふむ。

俺は少し考えてから月華の部屋から出て行くと携帯を使って友人に連絡を取った。
彼らは月華とは中学からの付き合いで、俺が知らない月華の昔をそれなりに知っているであろう人たちだ。
彼らと連絡を取り合い、明日の昼にうまい具合に全員の予定が開いていたので、その時間に会う約束をした。

―――――――――――――――――――――

次の日、場所はファミレス。

「おっそいよ！！神崎君」

そう言って迎えてくれたのは宮内（みやうち）　沙希（さき）で、その横に座っているのは橘（たちばな）　康樹（こうき）、宮内の向かいに座っているのが赤坂（あかさか）　扇（おうぎ）だ。
橘と宮内の格好は普通に普通なのだが。

「赤坂、その格好はなんだ？」

金色に染まった髪の毛。
首もとにはシルバーアクセサリー。
パンクスタイルだった、それ以上でもそれ以下でもなかったが。
まぁ、こいつも月華なみにルックスがいいのでどんな格好をしていても似合うのだが・・・。

「ああ、これか？
この色いいだろー？今日のために染めたんだぜ？」
「・・・」

今日のためって・・・。

もう何もいえなかった。
話を聞く前に赤坂が「俺、おなかすいたー」と言いやがったので、昼時だということと、俺の都合で呼んだので俺がおごると言うとさっさと高いものばかり注文しやがった。
現金な友人どもめ、俺の財布が薄くなるじゃないか。

「で、今日は何の用事だ？」

頼んだハンバーグを食べながら赤坂がたずねてくる。
ちなみにこいつはハンバーグのほかにもカレーまで頼みやがった。

「月華は”昔”何をしていたんだ？」

全員が、一瞬止まった。
赤坂だけが苦虫を噛み潰したかのように嫌な顔をしている。
俺にはその意味がまったく分からない。

「月華ちゃんの昔、ねぇ」
「神崎君、それはどういう意味？」
「だって、あいつのコネっておかしすぎるだろ？どうやったら警察の人をパシリにできるようなコネが生まれるんだ？」
「笹田さんのことだね」

宮内の確認に頷くとなぜか宮内はかしこまった。
ちなみに月華”ちゃん”と呼んだのは赤坂だ。

「あのね、その質問には悪いけど答えることができない、です」

なぜか敬語になっていた。
応えられないことに気まずさを感じているのだろうか。

「正確には私も知らないんです」
「オレもしらねーよ」
「俺も」

三人とも同じ回答をする。

「笹田さんだって、気付いたら十狩くんと知り合ってたって感じだし、私が笹田さんに以前お世話になってて、たまたま会いに行かなかったら気付かなかったよ？」

宮内はそう言ったし、赤坂はなぜか投げやり気味に月華自身にどんな手でも使って聞きだせ、と言う。
俺としては月華にどんな手を使っても聞くと言うのはいろいろ怖いので、せめてなにか手がかりがほしいんだがと思った。
その心の声が通じたのか橘が思い出したかのように話し始めた。

「関係あるのかは分からないがこんな話ならあるぞ」

## 第十五話（後書き）

「前書きのネタがなくなりつつある今日この頃」
『後書きのネタができたわね』
「そう、今回のは実際は次回、投稿する予定だったんだ」
『ええ、でも、なんとなく入れると不自然と言うか、変な感じになるみたいだったからやめたみたいよ』
「それっていつか掲載はするんだよね」
『最後の方にちょろっと書き入れると言っていたわ』
「そう」
『この作品では評価、感想などお待ちしております』
「キャラ紹介についてのアンケートもお待ちしてます」

## 第十六話（前書き）

あいつが俺から大事なものを奪ったから

俺はあいつを許さない

あいつが俺に言った言葉を、俺は絶対に忘れない

# 第十六話

そういうと橘は話し始めた。

「俺たちの高等部卒業の時だ」

俺たちが卒業した学校、というか学園である明神学園は中、高、大からなるもので、高等部卒業時にのみ盛大な卒業式を行う。
理由は高校進学時は持ち上がりだが、大学進学時は明神学園ではない大学に行くやつも多数いるからだ
そして、その卒業式のことだったらしい。

「俺たちが何処かで時間をつぶそうと校門の方で話をしていたら一人の女が現れてな」

ちなみに、校門とは高等部の校門のことである。
バイクで駆けつけたその女はニコニコ笑いながら彼らに近づいてきたらしい。
バイクで現れたことと、その女の見た目のせいで一瞬周りがものすごく静かになったらしい。
で、その女は月華に親しそうに話しかけたらしい。
もともと月華はその日なぜか時間をものすごく気にしていたらしく、その女が来たのを見るとすごいほっとしていた、らしい。

「ものすごく仲がよさそうだったな」

ちなみに月華がつけている赤と、青の石がついたイヤーカフス。
あれはその女が卒業式のときに月華に渡したものらしい。

「そういえば、その話は赤坂君がものすごく怖かったんだよね」
敬語じゃなくなった宮内が話に加わる。
何処となく赤坂の顔が不機嫌になっている気がする。
曰く、その時ちょうど赤坂はトイレに行っていていなかったそうだが戻ってくるなり女に向かって大声で怒鳴ってつかみかかったそうだ。

「あれにはびっくりしたよ、だって」

『何でお前がこんなところにいるんだよ、サジタリウス！！』

そう、怒鳴ったそうだ。
サジタリウス、何年か前に世間をにぎわせたやつで、やっていたことは盗み、詳しいことは忘れた。

「何でそんなことを言ったんだ？」
「あいつは、静音を殺した」

苦虫を噛み潰すようにして言い捨てる赤坂。
サジタリウスが唯一犯した殺人事件が彼の言う『静音』が関わっているらしい。
静音、うわさでは赤坂と当時恋仲だったという女性。
詳しいことは言いたくなさそうなので割愛。
どうやら赤坂はその時にサジタリウスの顔を見ていたらしい。
で、それが

「あの女にそっくりな、というかあの女と同じ顔だったんだよ」

なるほど確かに、愛しい人の仇ともなると激昂せずにはいられない

だろう。
ちなみに俺にはそんな経験はない。
愛しい人がいたということも、ない。
悲しきかな、俺の人生。

「そしたら十狩は平然と『俺の彼女がそんなことするはずがないだろう？』って言い切ったからなぁ、あの時以上の驚きにはいまだ会えてないよ」

橘がお茶を飲みながら言う。
へー彼女ですかー・・・。

「って彼女！？」

驚くだろう、そこは！！
だってあいつ彼女いない暦＝年齢だって言ってたぞ！！

「で、その彼女が『違うよー、月華はタダの友達』って笑顔で言い切った」
「うわぁ」
「でも、そのあとにね、『月華は大事なパートナー、かな？』とも言っていたの」

タダの友達だけど、大事なパートナーってなんだか矛盾してないか？
で、そのあとはいろいろあったのだが二人のことを詮索したがる彼らをおいて、二人してどこかへ行ってしまったと言うことだそうだ。

「神崎君が何を知りたいのかはなんとなく分かるけど、わたしたちも分からないし、この話で勘弁してくれる？」

確かに、何が知りたいのかはきっと彼らも分かっているのだろう。
とくに宮内。
だって、自分の友人とまったく縁なさそうな知り合いの人が実はその友人と面識があって、しかも友人が知り合いをパシリのように使っているとなると、俺だって何があったか気になる。
だが、ユウを笹田に見せに行ったときの反応を見る限り、笹田は決して教えてはくれないだろうし、月華もなんだかんだ言ってごまかすだろう。
これ以上は分かることは何もないだろうと思い、礼を言うことにする。

「ああ、ありがとう。
ちなみにその女の見た目は？」

月華が嘘とは言え、彼女だといった人間だからどんなのか気になるのはしょうがない。
きっと見目麗しい方だったのだろう。
それこそ、月華にふさわしいような。

「あの時の年齢はあの時の私たちと同じっていうか少し下くらいかな？
見た目は金髪に緑の瞳。
あのまま育ったらものすごい美人になってると思うよ？
あの時も美人さんだったし。
あのころの十狩くんとだと美少女二人に見えたけど、今ならものすごい美男美女のカップルが成立すると思うよ？
でも、性格はちょっと危なかったかも・・・」

あー、そういえば月華があんなにかっこよくなったのって大学生になってからか。

でも、そのころに美少女二人で成立するんだから、あいつの顔ってよほど女顔だったのか。
赤坂に見せてもらった昔の写真（高校のころの）を思い出してみる。
・・・確かにその女の顔は分からないが月華の顔は女装さえきちんとすれば美少女、に見えるだろう。
うん、美少女のインパクトに流されそうになったが、危ない性格って、どんなだ？
社会不適合者か？（犯罪暦的な意味で）
そう言ってしばらく飲み食いしたあと、俺たちは解散した。
帰り際に橘に声をかけられた。

「ああ、そうだ神崎」
「なんだ？橘」
「これは俺の個人的な意見だがな
あまり十狩の昔は詮索しない方がいいぞ？」
「何でだ？」
「なんとなくだ」

勘のいい、というかなんとなく、で何でも分かっているような橘の言葉を聞いて、俺は月華の家へと帰った。

## 第十六話（後書き）

「いやー話の核心？の後編でしたー」
『珍しく前後編に別れたわね。失踪じゃ初めてじゃないの？』
「そうなると思うよ？失踪の方は基本一話完結って言うか、一話につきワンシーンみたいな方針で書いてたからね」
『でも、このあとはワンシーン複数話が増えていくようね』
「そうだね。ここらあたりまでは平凡というか暇してたんだけどね。これは、ボクらの出番は近いってことかな？」
『うーん、多分まだよ。だってこのあと・・・（作者の頭の中のストーリーを説明中）』
「・・・そこまで待つの？」
『あきらめなさい。ね？
この作品では皆さんからの感想、評価、指摘、アドバイスをお待ちしております。お気に入り登録もしてくださるとうれしいわ。』
「あと、アンケートねー。
締め切りはえーと、一月十六日または十七日の失踪投稿時になりました。どしどし回答お待ちしてたりしますんで。
ちなみに内容はキャラ紹介の有無についてです。」

## 第十七話（前書き）

動き出したのは小さな歯車

さぁ、奏でなさい

道違(たが)えし者たちの始まりにして終焉へと続く曲の序章を

# 第十七話

時がたって・・・。
俺たちは今、黒ずくめの集団に囲まれてる。
どう考えてもあっちが悪役・・・だよな！！
だって俺悪事働いた覚えはないし、前にいる月華、後ろにいるユウもそのはずだ。
この間のことを考えると月華は、よく分からんな。
俺たちが乗っている車、の上にも人がいるらしい、目の前の女はそう言っていたし、そうなのだろうと思う。
以前見た写真の人は女だったようです。
なぜかって？

目の前にご本人がいらっしゃるから。

今日の朝、俺たちは近くにある遊園地に行くことになった。
近く、と言っても、遠くはないだけで、車で一時間ほど。
なぜか。
まさか月華が突然「俺が金を出すから遊園地に行こう」と言ったわけではないし、俺が仕事を放棄して家族サービスならぬ、友人サービスに目覚めたわけでもない。
それはユウが近所のスーパーでやったくじ引きが当たったから。
一等の遊園地ペアチケット。
俺は横で見ていたのだがその時のユウは二度パンパンッと手をたたいて「当たりますように」と強く願っていた。
それで当たるのだからすごいものだ。
運がよかったのだろう、ということでペアチケット＋一人で出かけることとなった。
で、十分に楽しんで、帰り。

なぜか月華のやつが運転席に乗り込む。
ちなみに車は四輪で俺の車。
行きは俺が運転していた。
そしてやつは四輪の免許なんてものは持っていない。
ゆえに、運転はできないはず。

「おい、なぜお前がそこに座る」

ちなみにユウは後ろの座席ですでに準備万端である。

「ん？俺がこっちの方がいいと思ったからな？」
「運転しないと帰れないだろ？それともお前はここで一泊するつもりか？」
「そんなつもりはまったくないぞ」
「じゃあ・・・」
「あの、神崎さん、月華」

後ろの席に座るユウが声をかけてくる。
俺がそれに答える。

「どうした、ユウ？」
「いえ、なんか囲まれているみたいです・・・」

俺は後ろを振り返る。
ついで前を見る。
右を見て、左も見たし、首をぐるりと動かして周りを確認した。
いたのは人、人、人でユウのように囲まれたというのが正しい状況になっていた。

「悠」

名前を呼ばれた。
呼んだ相手はめったに俺のことを名前では呼ばない月華。
この状況になっても、ただめんどくさそうに大仰なため息をついている。

「とりあえず、後ろに乗れ」

助手席へは少し遠いからさっさと後ろに乗れとのことだそうで、気迫に押されて素直に乗る。
何で相手はあいつなのに俺は素直に従っているんだろうか・・・あいつだからだろうか。
でも、あいつの言葉ってなんかこう、重みがあってだなー。
・・・言い訳をしているとなんだか悲しくなってくる。
そして、車の前にいた仮面の人間はいつぞやの写真の人物、のはずの人物。
どんっという音がして車が少しばかり揺れる。

「ああ、動かんでください車も出さないでくださいな。
上にいる仲間が殺しますからね」

そういうとその人は仮面をはずした。
仮面の下は美人な顔。
月華と町を歩けば超がつく似合いのカップルで道行くすべての人がうらやむだろう。
だが、そのきれいな顔から、口から出てきた言葉は直球すぎる怖い言葉だった。

## 第十七話（後書き）

「今回はめちゃくちゃ短いね」
『単話にどうやって手を加えたらいいのかわからなくなったそうよ』
「スランプってやつ？」
『さぁ？』
「ま、次回は一応それなりの長さになる予定みたいだし？紅月も頑張って書く意思はあるみたいだし？」
『あまりプレッシャーはかけないであげときなさい』
「へいへい。で、とりあえずメリクリ！！」
『紅月がクリスマスに何か短編を書こうと思ったらしいのだけれど思い立ったのが今日の昼じゃあ、何もかけないわね』
「うーんでもいろいろ考えてたみたいだよ？書くかはわかんないけど」
『ま、いいわ。紅月の都合なんて。
このの作品では皆さんからのメッセージ、評価、感想などお待ちしております。あとアンケートの回答もお願いします』

## 十八話（前書き）

聞こえますか、私の声が
届いていますか、あたしの思いが
感じていますか、あなたの居場所を

## 十八話

「何が狙いだ？」
「何でしょうなぁ？
というか、あんさんがたはわかってはるやろ？」

俺の冷静な問いに、女はゆるゆるとした感じに答える。
正直、心臓はバクバク言ってるし、呼吸も荒くなってきていて、意識を失ってしまいたくなる。
失ってしまいたくなるのだが、それをした瞬間どうにかなるのかはまったく予想ができない。
・・・何も起きないかもしれないが。

「ユウ、か」
「ユウ？ああ、お嬢様のことですねぇ。
そうですよ？
ですからおとなしくこちらに渡してくださりましたら、あんさんがたには手をだしませんえ」
「渡すわけがないだろうが」

俺は緊張を押し殺して女と会話を続ける。
正直、今すぐ会話をやめたいのだが、時間を稼ぎたかった。
なんとなくだが（おそらく、長年の付き合いのなせる技だろうが）月華のやつが「時間を稼げ」と言っているように感じたのだ。
もちろん月華は何も言っていない。
横にいるユウは怯えるわけでもなくボーっとしている。
どこか遠くを見ているような、そんな目。

「だいたい、はじめの時はユウはお前らのことを嫌がってたじゃな

いか」
「ええ、そうですねぇ。
でもですねぇ、うちらの方もいい加減にお嬢様に来ていただかんと困るんです。
早くせんとうちらの仕事が達成できんのです」
「そういえば、初対面の時に『とあるお方』からの依頼で、とかと言っていたな」
「依頼主さんがそろそろ痺れを切らしてきとりましてなぁ。
いい加減にせんとうちらが損をしてしまうんです」

いい加減話すことがなくなってきた。
だがまだ、時間を稼げ、というプレッシャーを感じる。
何か、何か、時間を稼ぐような何かはないだろうか。
相手は俺が何も言わなくなったのを見て部下に何か指示を出している。
気持ちだけが、焦る。
そんなときだった。

パシャ。

パシャ？
音がした。
おそらくカメラのシャッター音だ。

パシャ。

また、カメラのシャッター音。
写真を撮ったのは月華だ。

「悠、もういいぞ」

そう言って月華はカメラを俺に渡す。
絶対に壊すな、とられるな、と厳命してだ。

「あんさん、偉い冷静やなぁ。
うちの写真なんかとってどうする気や？」
「なに、ちょっと都合でな、お前の顔写真がほしかったところだったんだ。
悠とグダグダ喋っててくれたおかげでゆっくり写真が取れたよ」
「あまり、記録を残されると困るんですけどなぁ」
「なら、あんまりだらだらと喋るな、三下」

今とてつもない、爆弾発言しなかったか？こいつ。
あーなんか向こうが震えてるよ。
あれは、怒りか？
もう、俺の中では緊張も通り越して一周して逆に落ち着いてきたぞ？

「三下？うちが三下ですと？」
「お前が、というかお前らが、だな。
仕事をするならもっと手早く余計なことも言わずに終了させるべきだったな」

いやいやいやいや、月華、お前今のこの状況分かってるのか？
どう考えてもこっちが不利だろう？
なにを挑発してみてらっしゃる？
車の周りにぐるりといらっしゃる皆々様が見えてらっしゃらない？
俺の考えをよそに、月華は轟然と言い放った。

「俺たちは帰る。
できれば道を開けてくれないか？」

「それを、三下呼ばわりされたうちらがするとでも？
それにここには結界が張ってありますから出ることすらできまへんよ？」

結界？今結界って言ったか？あの女は。
なんか一気にファンタジックになったぞ、おい。
月華は無言でアクセルを踏んだ。
まるで、お前（三下）らには用は無いとでも言うように。

## 十八話（後書き）

「ほぼ単話のままの投稿でしたー」
『皆さんあけましておめでとうございます。今年も、紅月の書く小説をなにとぞごひいきに』
「律儀だね、キミは」
『というか、紅月に渡された紙を意図的に無視したあなたのフォローをしているだけよ』
「・・・それが律儀っていうんだよ？」
『まぁ、いいわ。去年の内にもう一話投稿できなかったのを若干後悔していたようよ。だから、今年はこの話を皮切りにまた、定期更新をしていくそうよ』
「勇者未満は相変わらず不定期更新で頑張るって言ってたね」
『頭の中の構想を固めるだけだそうだから、次はわりと早いのかしら？』
「さあ？すべては―紅月≪神≫のみぞ知るってね」
『・・・私はあれを神と呼ぶことに抵抗を覚えるのだけれど、ある意味そうね』
「ボクらの生みの親だしね」
『今回はここまで、ね。
この作品では皆さんからの評価や、感想、アドバイスなど、お待ちしております』

## 第十九話（前書き）

あの日あの時あの場所であんなことに巻き込まれなかったら知らないままでいたこと

たとえそれが、知らないほうがよかったことなら俺は後悔しただろう

あの日あの時あの場所で彼女と出会わなければ知りえなかったことがある

彼女と引き合わせてくれたことを一体誰に感謝すればいいのだろう

# 第十九話

車が急発進する。
俺はその反動で、シートに押し付けられる。
そのまま、女に激突、かと思ったらぐるりとUターンをして後ろの連中の方に向かって突進していった。
後ろのやつらは、Uターンしてくるとは思わなかったのか、思わず道を開ける。
そのまま突き放したかと思いきや、おそらく、女の命令で俺たちを追ってくる。

「ちょ、月華、タンマ、タンマ！！」
「この状況で、何を言ってるんだお前は？」

俺はお前が何でこんな状況にしたのかを知りたいよ！！
でもとりあえずは

「どうやって逃げる気だよ。」
「ふむ、手はあるのだがな・・・。
とりあえず、足元に転がっている袋のものを使ってくれ。」

そう言われて足元を見ると確かに袋が転がっている。
袋を持ち上げて中身を確認する。

・・・

大きく息を吐き、もう一度確認する。
そこには球形をしたピンのついたものがあった。

「これは？」
「見たことないか？手榴弾だ」
再び月華がハンドルを大きく切るが今度はどうにかバランスをとりながら、反論する。
結構なスピードだが、追ってきているやつらにぶつかっている様子はない。
「日本に住む、一般人が本物なんて見たことあるわけないだろうが！！
せいぜい、漫画の世界くらいだ！！」
「あんまり喋っていると舌をかむぞ？とりあえず黙ってピンを抜いて投げ捨てとけ」
無理だ！！いや、使い方は漫画やらで見てるから一応分かるけど、これ兵器だよ？
一般人の俺が、いくら（おそらく）敵とはいっても人に使えるわけないじゃん。
俺が悶々と悩んでいると誰かが袋をひったくっていった。
月華は運転中、俺は袋を持っていた側、だとすると袋を持っていったのは・・・。。
「これ、投げればいいんだよね？」
ユウだった。
ピンも抜かずに、袋をひっくり返して、窓から外に投げる、というよりも落とす。
幸いに、というか俺はそんなものについてなんて詳しく知らないのだが、地面に落ちた衝撃で爆発することも、車がうっかり轢いて爆発することもなかった。

いや、手榴弾って投げて使うものみたいだし爆発しなくて当然なのか。

「月華、このまま直進して！！」

「あ、ああ。」

急なユウからの指示に驚いたのか月華がぎこちなく頷き、直進を続ける。

後ろの追っ手はまっすぐ車を追いかけるようにしてきているので、彼らと、手榴弾をばら撒いた位置が重なる。

どうやら、ピンを抜いていない手榴弾など恐れるに足らずと思ったのだろう。

あるいは見慣れているのか。

手榴弾を見ても、彼らの足取りに迷いはない。

ピンを抜いていないから、爆発はしないのでその辺も分かっているのだろうか。

「バク！！」

ユウが言葉を放つ。

すると、追っ手の移動が止まる。

「バク！！」

もう一度、同じ言葉を言うと、今度は爆発が起きた。

何が起きているのかは分からないがどうやら、手榴弾が爆発したようだ。

どうやってかは分からない。

ユウはふぅ、と後ろを確認すると背もたれにもたれかかった。

追っては一時的にとまっただろうと思い、俺の顔にこれで、一安心

だと笑みがこぼれる。
だが、
「ユウ、上に乗ってるというやつらもどうにかできるか？」
そうだ、上にも人がいるのだと、あの女は言っていた。
依然として結界とやらは存在しているらしい、とは言っても俺には分からないんだがね。
月華がそう言ってたんだよ。
上に乗ってるやつが結界張ってるやつだろうって。
そうだとしても上に乗っている人をユウがどうにかできると、月華は思っているのだろうか。
まさか、ユウに上に登ってもらってユウにやっつけてもらうのか？
いや、無理だろうね、てかユウにはあんまり危険なことをしてほしくないし。
さっき、手榴弾をユウがばら撒いた時も心臓が止まるかと思ったよ？
結論、俺は無理だと思
「多分どうにかできると思うよ。」
うけど、そうだよね・・・ってできるんですか、ユウ！！
「思いっきりターンをしてくれたら、その時にでも」
月華は合図をしたら、ターンすると言った。
ユウもそれを了承した。
なんとなく、ユウの雰囲気がいつもと違う気がする。
いつもと違って、なんかこう・・・。
「じゃあ、行くぞ！！」

その合図を受けてユウは車の天井に手を当てる。

「イガミ、ジュウハン」

まるで、これがしっくりきている、というか。
”ユウ”ではないような。
ユウの言葉と、俺が思ったのと、月華が車を大きくターンをさせたのはほぼ同時だった。
俺は今度はドアの方に押し付けられる。
そして、どさっと車から、何かが落ちる音がした。
ターンの衝撃から開放されて後方を確認すると人だったようだ。
ほんとに、人が乗ってたのか・・・。
人が落ちたのを確認すると、月華は再びアクセルを踏んだようで、車がさらに加速する。
そのまま、直進して行った。
今度は誰も追っては来なかった。

## 第十九話（後書き）

『失踪まで投稿とは紅月も末期症状ね』
「あーあれね。通称「めんどくさがり病」」
『まとめて投稿するのはいいけど、もう少し推敲しなさいよ』
「一応してあるよ？紅月自身はどう収拾をつけようか悩んでるみたいだけど」
『ま、いいわ。この物語はすでに終幕に向けて進んでいるもの。』
「紅月も書ききる気だけは十分だからねー。ボクらの出番がなくなる心配をしなくていいってのは安心できるね」
『ええ、そうね。それではまた次回、会いましょう』

## 第二十話（前書き）

鏡に触れて、向こうの世界に夢をはせる

向こうから手が伸びてくることがないのは分かっている

それでも、夢を見るのを止められない

# 第二十話

ふと、前を見るとそこにいるはずの女の人はいなかった。
真っ白な空間。
座っていたはずの私はいつの間にか立っていた。
そこにいたのは私とそっくりな、ううん、私の顔をした、彼女。

「あなたは、だれ？」

口から出た言葉は確かなものとして、彼女に届いたようだ。

『あたしは、あなた。・・・ううん。あなたは、あたし。と言ったほうがいいのかな？』

「私？」

そう言いながら彼女は私の手をとる。
その手にはぬくもりがあって、実体があって、まるで私と変わらない。

『この状況をどうにかしないといけないよね？？あなた？の気持ちも？あたし　？と同じだよね？』

そういうと彼女は私の手をぐい、と引っ張った。
突然のことにびっくりした私は引っ張られるままにバランスを崩してしまう。
そして、彼女の後ろにあるものに目を向けた。
目に見えるものは何も、なかったけれど、私は確かに何かを越えたし、彼女もその何かを越えた。

反転する。

私と彼女。

反転する。

あたしとあなた。

覚醒する。
夢から目を覚ますように。
認識する。
目の前の状況を。

横では神崎さんが袋の中身を見て月華と文句を言っている。
どうやら、会話の中を聞いていると袋の中身は手榴弾のようで、あたしは瞬時に判断を下す。
それは、習慣。
教え込まれた、自衛の手段。
彼女の言葉を思い出す。

『その気になっている敵に、手加減は無用だよ。』

◆◇◆◇◆◇◆

「これ、投げればいいんだよね？」

そう言って、袋を神崎さんから奪い取った私はその中身をぼとぼとと車の外に落とす。
次にすることは・・・

「月華、このまま直進して！！」
「あ、ああ」
あたしの指示は彼女ならありえないような勢いを持っていたのだろう。
月華は動揺しながらも、あたしの言ったとおりにしてくれる。
車を追ってくる後ろの連中と、手榴弾の位置が重なるのを確認する。
「『縛』！！」
追っ手の動きを縛る。
「『爆』！！」
手榴弾を爆発させる。
この程度では傷を負うかも分からない連中だけど、足止めくらいにはなるし、こんな単純作業なら『一文字』で事足りる。
『一文字』の『縛り』を瞬時に解けないなら、その程度、つまりは、とりあえず後ろのやつらはこれでいい、と背もたれに寄りかかる。
あとは・・・。
「ユウ、上に乗ってるというやつらもどうにかできるか？」
どうやら、月華はあたしと同じことを考えていたようだ。
何でそんなことを知っているのかというと、別に、気配を察知したとかじゃなくて、あたしを追っていたあの女の話を聞いていただけ。
さすがに『一文字』で落とせと言われたらさすがに無理だが、『二文字』を重複させればできないこともない
「多分どうにかできると思うよ」

だから、あたしは月華にこう返した。
横で神崎さんが驚いた顔をしているけど、気にしない。
少しだけ、どうやって落とすかを考えて、月華に指示を出す。

「思いっきりターンをしてくれたら、その時にでも」

月華はターンをするときに合図をすると言ってくれた。

「じゃあ、行くぞ！！」

あたしはその合図に合わせて天井に手をつけて『言（ゲン）』を放つ。
言（ゲン）、あたしが使えるやつらに対する唯一の対抗手段だ。

「『以上（イガミ）』、『重反（ジュウハン）』」

範囲指定と、状態指定の二つ。
これより上にいるものの、重心を、反転させる。
ターン中に内側に傾けた重心を反転させると、外向きになって放り出されるだろう、という考えだったのだけどうまくいったようだ。
それに、彼らが術者だったのだろう。
今ので周りの結界にほころびが生じたのが分かる。
そのまま月華は車を進め、あたし達は結界から出ることができた。

## 第二十話（後書き）

『それにしても紅月は戦闘描写？がへたよねぇ。』
「自覚はしてるって。どうやったらうまくなるのかは知りたいんだって。」
『それにしても、この話、専門用語的なのが説明なしで放置されてるけど、それはいいのかしら？』
「あー確かに、感想の方にきてたね、それ。というわけで、紅月から預かってきました。「この話の専門用語的なアレは全部、最終話あたりで説明します。ぶっちゃけ、今説明するとネタばれなのでご了承ください。」だそうです。」
『感想を下さった方には感謝しております。』
「いやぁーほんとに。昨日の紅月の反応はすごかったもんねー。詳しくは活動報告で書くらしいので、ぜひともそっちで。」
『それでは、また次回、会いましょう』

## 第二十一話（前書き）

真っ白な世界を、針のない羅針盤を片手にただ進む
その世界の果てで見つけた標は、果たして、希望か
はたまた、絶望なのか
それでも、歩みを止めることはできない

# 第二十一話

―？？？―

「時間切れ、かな？まぁ、いいや。とりあえずどうにかなったし」

彼女が思い出せないようではあたしは思うように動けない。
せいぜい、今のようにピンチになった時に無理やり干渉するくらいしかできない。
あの時に押し込められた？あたし？という？人格（能力）？は彼女が思い出さないともとには戻れない。
時間切れというのは無理やり反転させた境界がもとに戻るということ。
ここからはまた彼女に頑張ってもらうしかない。

「早く、思い出しなさいよ。」

そうこぼして、あたしは彼女にバトンを渡すようにして意識を沈めた。

◆◇◆◇◆◇◆

―悠―

「時間切れってどういうことなんだ？ユウ」

たった今見せられたあまりにもファンタジー過ぎる光景に俺は理解が追いついていない。
唯一理解できたのはたった今、ユウが言った言葉である「時間切れ」

。
よく聞こえなかったが他にも何かをつぶやいていた。
たずねた言葉に返事はない。
見ると、寝ているようだった。
そのまま、月華の家までまっすぐに帰りつき、家に戻る。
それでも、ユウは起きることはなかったのでとりあえずおんぶをして運び部屋のベッドに寝かせた。

「無事に帰れてよかったな。」

リビングにて、お茶を飲みながら月華が言う。
無事にって、まぁ、確かに危険な空気がビシバシ流れてたけどね？
せっかくなので月華にも聞いてみる。
ユウの豹変振りや、「時間切れ」について。
特に豹変振りのほうには俺の考えも混ぜておいた。

「というわけなんだが・・・。」
「ふむ、俺としてはあまり推測でものを言いたくはないが、なぜピンを抜いていない手榴弾が爆発したり、突然屋根の上の人間が落ちてきたのかには一応考えがある。」
「どんなだ？」
「自分で考えようとは思わないのか？」

思うわけがないじゃないか。
そういうわけの分からない事に巻き込まれたことのない身としては「おかしなこと」でしか片付けられない。
考えがあるというのならぜひともその考えとやらを聞きたい。
月華は俺の心を読んだのか、大仰にため息をつくと話しはじめた。
「”言霊（コトダマ）”って知っているか？」

「名前くらいならな。あれだろ？こう陰陽師が使うような。」
「それじゃないかと、俺は思う。以上。」

・・・

「わんもあぷりーず。」

しまった！！要求がへたくそな英語になってしまった！！
てか、よくこの状況で英語なんて出てきたな！！

「”言霊（コトダマ）”って知っているか？」
「名前くらいならな。あれだろ？こう陰陽師が使うような」
「それじゃないかと、俺は思う。以上。」

・・・
確かに”わんもあ”だけどさぁ！！

「もっと詳しく！！」
「俺は、あまり推測でものを言いたくないと言った気がするんだが」
「俺は納得できない！！もっときちんと説明しろ！！
だいたいなんなんだよ、手榴弾とかって、何でお前（一般市民）が持ってみてるわけ？
せ、つ、め、い！！」

そのあと、いくら月華に詰め寄っても月華は頑として口を割らなかった。
あいつのあの顔は絶対に何か分かっている顔だった。
それが分かっているからこそ、俺はあのメールを見たときからずっと胸にわだかまっていた思いを月華にぶつけた。

「どうせ、自演じゃないのか？」
「なに？」
不機嫌そうに月華が聞き返してくる。
一度、吐き出した言葉は止まらなかった。
「あの、メールの相手、アリスって言ったか？
どうせそいつと連絡取り合って、今日のことを起こしたんだろ？
演技にしちゃあ、ずいぶんと熱演だったけど、お前、一体何がしたいんだよ？」
箍が外れたようにまくし立てる俺に対して、月華は冷めた目で俺を見たあと、何も言わずにリビングを出て行った。
そして、そのまま俺は不貞寝。
◆◇◆◇◆◇◆
―月華―
「あれが、自演だと？」
あほらしくて笑いがこみ上げる。
あれが自演なら、もっとうまくやる。
重要なことはあいつは、俺があの女と手を組んでいると思い込んでいることではなく、メールとやらのこと。
どうやら、俺が知らないうちに勝手に見た上に、勝手に処分までしてしまったらしい。
それも、アリスからのメールらしい。
悠の話を聞いてだいぶユウのことが分かってきた、というか予想がついてきたのだが、アリスからのメールがあったとなると間違いな

い。
これは、あのパターンだ。
俺は巻き込まれたパターンだ。
間違いなく。
己の仕事部屋で思考する月華はカメラを取り出した。
先ほどの連中のリーダー格であろう女の写真が入っているカメラだ。
女の声も録音しておいた。

「まったく、あまあまな悪役だったな。」

だがしかし、俺と、あいつが関わっているのだから狙われているユウは間違いなくあいつの関係者。

「あー、本当に、もう・・・。」

こぼれた悪態は笑みに変わる。
たまたまとはいえ俺を巻き込んだのはやつらの災難だ。
せいぜい、けんかを売ったことを後悔してもらおう。
あの女の話を聞くに、俺があいつとかかわりがあるとは、やつらは知らないようだ。

「それなら十分、だな。」

そういうと月華はパソコンに手をつけた。

## 第二十一話（後書き）

「どこまでも、どこまでも、ね。」
『どうしたのよ、唐突に。』
「うん、つい最近読んだ本にこんなせりふがあってさ、前書きがこんな感じに近いなぁ、と思ったから、つい。」
『へぇ。それにしても、視点？？？ってだれ？』
「とぼけちゃだめだよ？ボクらは知ってるじゃん。」
『まぁ、そうなんだけど、そこはほら、読者の皆様に話を振ってるのよ。』
「読者の皆様はリアルタイムで答えてはくれないよ？」
『分かってるわよ。』
「それでは、また次回で、会いましょう。」

## 第二十二話（前書き）

声が響くのを止められないの

まるで何かをせかすような、その声なのに

私には何を言っているのか、まったく分からないのに

# 第二十二話

―悠―

次の日、俺は会社を休んだ。昨日、あんな現実離れなことを体験した後に平然と会社に行くということができるほど、俺の精心神は丈夫にできてはいなかったのだ。というのはただの冗談で、実際はちゃんとした理由がある。

休むことを伝えると、上司は非常に心配そうな声で俺の体調を気遣ってくれた。確かに、ここ最近ユウのことでちょろちょろ休んでるからなぁ。仕方ないといえば、仕方ない。そんな上司の優しい言葉に対して謝罪を返しながら、俺は今日、会社を休む？理由？について考えていた。

今日は、昼からユウをつれて、警察へと行くのだ。

正直、すっかり忘れていたのだが、笹田から、一応、調べ終わって報告するから来い、と連絡が入ったのだと、月華が言っていたのだ。

ユウは珍しく、朝遅く起きてきて、少しばかり頭痛を訴えたが昼ごろにはすっかりおさまっていた。頭痛、と聞いて、よくある記憶が戻る兆候だと思ったのだがそれはなかったようだ。残念なような、安心したような、複雑な気持ちだ。

◆◇◆◇◆◇◆

「すまんが、ここ最近の捜索願に該当するようなものはなかった。」

この間笹田と話していたロビーところとは別の個室。目の前には頭を下げる笹田。横にはゆっくりとお茶を飲む月華。昨日のことがあった後なので、俺は月華とユウの間に座っている。さすがに、こ

こで何か起こすとは思ってはいないが、何か起こされたら困る。その月華が笹田に尋ねた。

「もう一つのことは？」

「もう一つってなんだ？」

もう一つって、俺のときは捜索願だけだったじゃねーか、という意味も込めて聞くと、その後に追加で頼んでおいたらしい。

その内容というのが。

「ああ、事件の大小、またその詳細を問わず行方不明者が出て、かつ、その人物がいまだ発見されてないもの。約八年ほど前のものだったな。

そのころにあったやつで、お前がいう条件に当てはまったのは一つだけだ。」

そう言って、笹田は一枚の新聞記事を出してきた。扱い自体は小さく、内容もぶっ飛んだものだ。でも、俺はそれに見覚えがあった。

『現代の神隠し、親子二人が行方不明』

そう、タイトルがふられた記事は――――。

「八年前に、起こった事件だ。事件当時の天気は雨。普段からそれなりの人通りがあったところらしいが雨のせいか目撃者は皆無。

かろうじて、「あの時間帯に、ここを通っていった」という情報があった程度の事件だ。それがどうして発覚したのかはいまだに分かっていない。それにこの事件には身代金などの要求も無かったから、マスコミの方もこんな記事を書いただけでおとなしくなった。」

事件が発覚したのは、単純に職場の人や、子供の友人がいぶかしんだりしたからだ。俺はこの事件を知っている。

「行方不明になったのは、神崎美晴（カンザキ・ミハル）とその娘の涼（スズ）の――――。」

ガタッ。

不意に椅子に座っていたユウが立ち上がった。何事かと見る俺に対してユウは、笑いながら答えた。

「いえ、なんとなく聞き覚えがあったような気がしたので。」

何に、対して聞き覚えがあったのかはよく分からない、と笑みを崩さずに答えた。

そのユウの顔はどこか寂しげだった。

「本当に、他にはなかったのか？」

「ああ。なかったな。」

「そうか。」

そう言うと、笹田に礼を言い、そのまま部屋を出て行った。俺も、礼をしながら急いでユウと一緒に月華を追った。

◆◇◆◇◆◇◆

月華の家に戻って、リビング。

全員が、食事をするテーブルを囲む椅子に座っている。これから、会議でも始める気なのだろうか、月華は笹田に聞いたことをまとめるように話し始めた。もしも、本当に会議を始めるなら、司会は月華だ。

「まず初めに、ユウ。」
「はい。」
「昨日のことを覚えているか？」
「人に囲まれたところまでは覚えています。その後は気付いたらこの家で、朝になってました。
あ、でも……。」
「でも？」
「？あたし？に会いました？」

何を言っているんだ？
自分で言ってみても、よく分からないことだったのか首をかしげながら疑問系で話すユウは、それを聞いて真剣に悩む月華に、「なんでもありません」と慌てて自分の言ったことを取り消していた。

「朝に言っていた頭痛は？」
「今はすっかりありません。」

昨日のこと。
それを聞いていた俺が身を硬くしたことに気付いたのか気付かなかったのか、月華は次の話題に移った。

「次に、悠。」
「おう。」

何を言われるのか、という緊張でさらに、体が硬くなるような錯覚を覚える。

「俺はあいつらの味方ではない。」

どうやら、昨日の俺が問い詰めたことについてらしい。ユウは理

解できずにいるようだが、ユウには俺が月華を疑っていた、ということを知られたくないので、適当にごまかす。そのあと、月華が続けたものも十分理にかなっている。

○もしもぐるだったら。

・昨日のあの時点で、ユウをあいつらに渡している。

・だいたい、月華をこの家に泊めない。

・そもそも、彼らがユウを探しているのを知った時点でユウを渡している。

「それに、どちらかというと俺はあいつらにとって敵のの味方になるな。」

言い回しが少し、遠回りだったので、少し時間を要したが、つまり

「あいつらとは、敵？」

「そうだ。」

じとっと睨むような目で見られながらだと、俺は頷くことしかできない。

「分かった。信じよう。ただし、疑いはまだ完全に溶けたわけじゃないから。」

「そうか。」

そういった瞬間に、拳が飛んできた。俺は思わず避ける。何をする気だ、突然。

「お前、俺にメールがどうのって言ってたよなぁ。」

「あ、ああ。」

だれか！！
俺に救いの手を差し伸べてくれ！！
月華からどす黒い殺気を感じるんだ！！
俺は何もしていない、無実だ！！

「俺はそんなメールを見ていない。つまり、お前、俺に黙ってパソコンいじっただろう？」

自業自得でしたー。でも、あれは、防衛本能が働いたというか、あれが最善だと思えてだなぁ！！
俺は何とか弁明を試みる。

「ちょっと待て、待てって！！あの時は気が動転していたんだ。仕様がないだろうが！！」
「ああ、そうかもな。」
「そうだろう？」

すこし、ほっとする。ああ、よかった、誤解は解けたみたいだ。

「だがそんな台詞ですんだら、世の中、警察なんて要らないんだよ。」

その日、月華の家で、ものすごい悲鳴が上がったそうな。

## 第二十二話（後書き）

「紅月もすっかり忘れていた笹田の登場です。」
『そもそも、笹田っていうのも思いつきで生まれた存在だしねぇ。』
「改稿作業してて、発見して「そうだ、こんなことあったんだ！！」って言ってたね。」
『あと、紅月から伝言よ？「そろそろ出番だからー、多分」っていわれたわ。』
「多分、ってなに、その不確かさしか感じないのは。ま、いいやそれじゃあ、また次回！！」

## 第二十三話（前書き）

扉の鍵守は扉の前で鎮座する

その扉を開くものが、呼ぶのを待ち続けて

# 第二十三話

―悠―

あの後、ユウは、見てはいけないものを見てしまったような顔をして部屋へと戻っていった。そんなに、月華のイメージを壊すものだったのだろうか・・・。むしろ、あの目は哀れなものを見るような目だった気がする。俺ってそんな人間だったか？

「さて、悠。」

まるで、今までのことが無かったかのように話を変える月華。だがそれを突っ込むと、再び先ほどのようなことが起こるのだろう。先ほどのこと？何も言うまい。俺は何もされなかったんだ。そういうことにしておかないと、脳内消去だ。

「なんだ、月華？」

なので、月華に話をあわせるようにして、俺もその流れに乗る。

「さっきの、事件の話。お前は知っているか？」

「知っているも何も――――。」

そう、知っているも何も、俺はあの事件の当事者の一人。笹田の話には出てこなかったが、あの記事には続きがある。神崎美晴には娘、涼のほかにも、息子、悠こと俺がいる、ということだ。あの事件の時に、俺は親と、妹の二人を失って、天涯孤独の身となった。

父親とは離婚していて疎遠。母親である美晴の財産が無かったら、今、俺はここにはいない。

「それが、どうした？」
「さて、どうしたのだろうな。」
「何かあったのか？」
「別に、何も。ただ、どうしてユウはここにきたのか、と思っただけだよ。」

憎らしいほどの笑みを崩さない月華。こういう顔をしているときの月華がどういう状態なのか、俺はよく知っている。
大学卒業前に作った卒論で詰まった部分をどうにかできたときにこんな顔をしていた。つまり、こいつは分かったのだ。ユウが？誰？なのかを。そして、今のこの話の流れだと・・・。

「まさか、ユウは。涼だって言うのか？」
「確証はないがな。そして、確証を得るにはユウのことを知っているやつが必要だ。」
「でも、いや。涼は見つかっていない。見つからなかった。俺だってもう死んだと思っていたんだぞ？今頃、実は生きてましたって、何の冗談なんだ？」
「実は、ユウのことを知っているやつに心当たりがある。そいつ、そろそろ来ると思うんだが・・・。」

そいつに事情を聞かないとなんとも言えないらしい。後はそいつからの説明からだと、月華は言った。

「じゃあ、ユウ＝涼、と仮定してだ。じゃあ、涼は今まで何処にいたんだ？それに、何で急に現れた？」
「だいたい分かるが、俺が言っても信じなさそうだから、説得力のあるやつからの説明が要るな。それも、全部そいつに聞かないと分からないし、そいつに聞いたほうがいい。あいつはいろんなことを

黙ったまま、物事を進めるたちだからな。最後まで話が進まないと教えてくれなかったこともある。」

そいつの名前は、アリスというらしい。あの、メールの送り主。俺が勝手に返信して、削除して、それをしたせいで月華が切れる元凶になった、あのメール。

いや、元凶は俺か。

やったことは後悔してるし、反省もしているが、月華があそこまで起こるとなると、逆に何でそんなに怒られんといかんのか、と逆切れしそうになる。なんにせよ、アリスという名前らしい。

「名前からして外国人か？」

「まぁ、そうなるな。ちなみに滅多にここにはこない。」

「それなのに近々来るのか？」

「来るって連絡があったからな。」

とは言っても、連絡がきてから、実際に来るまでにかかる時間はまちまちらしい。早いときは、連絡がきてから三十秒後、遅い時は一月以上かかるらしい。

ちょっとまて、なんだ？三十秒後って。瞬間移動か？

「あいつは、かなり時間にルーズだからな。正直、待たされる身にもなれって思うが、面と向かって言っても何処吹く風だからな。」

つまり、気長に待てってことか。

正直、待てるかー！！って感じなんだがな。

## 第二十三話（後書き）

「やっとここまできたよー。」
『確かに、やっと、ね。』
「この話は前に書いておいたやつなんだけど、これ書くまでに他の小説のネタって言うか、設定が頭の中にぽんぽん浮かんできて、どうしようかと思ったらしいからねー。」
『これが完結したら、どうするのかしら？』
「うーん。思いついたやつをつらつら書いていくのかな？ま、どっちでもいいけどね！！」
『それではまた次回』

## 第二十四話（前書き）

この目に映るものは綺麗なものばかりで、幸せにしてくれた
この眼が見せたものは汚くて、人を簡単に不幸に突き落とした
誰も、こんなものが視たいなんて願ってなんかいなかったのに

# 第二十四話

―月華―

さて、今日はどうしようか、と考える。
主だった仕事は遊園地に行く前に全部終わっているし、掃除、洗濯の類はしなくてもいいし。今日は一日暇か、そう思って外を見たときに、今考えていたことが吹き飛ぶ。急いで、仕事に使っていたメモや、印鑑などの貴重品を仕事部屋にあることを確認して、ユウにも貴重品があるなら持ってくるように言う。不思議そうな顔をしながらも、ユウはおとなしくその言葉に従った。
とは言っても、ユウが貴重品といえるものをそんなに持っているわけも無く、たいした量ではなかったことにちょっとばかりほっとした。
仕事部屋はあまり広くないから悠の分も考えると部屋に置けるかちょっとだけ不安だったからな。

「でも、なんで急にそんなことをし始めたんですか？」
「なに、杞憂に終われればいいな、とは思っているが。」

そう、杞憂で終われればいい。だが、俺の？眼に視えた？あれは、杞憂で終わることがないことを示している。俺の答えにさらにわからなくなったような顔をしているユウを置いて俺はメモを持ち出して部屋の扉に貼り付けた。

「俺の許可無くこの部屋に侵入することを禁ず。」

そう書いたメモを貼る前にユウに確認する。ちなみに悠の荷物はもうこの中だ。出したいといわれても、知らん。そもそも、その時

に俺たちがここにいるかも分からんがな・・・。

「でも、月華。あんなのがはってありますと私としては気になって入りたくなります。」

「ま、そうだろうな。でも、実際、アレを張っておくと入れなくなるんだよ。」

俺の許可無く、とあるが一人例外がいる。それは、無視していいだろう。さて、これからしばらくこの状態だな。あの感じからすると、下手したら、今日中に動くんだろうな。

俺はそう思いながら庭の片隅に目を向ける。ユウも俺の視線を追って庭の片隅を見るが、俺が何を見ているか理解できなかったらしい。変な月華。と言ってどこかへ行ってしまった。事前に今日は出かけないようにと言ってあるから、外へ出て行くことはないだろう。

さて、何か動きがあるまでどうやって暇つぶししようか。そういえば、録画して、まだ見ていないのがあったんだった。それを見よう。

◆◇◆◇◆◇◆

―月華―

俺がビデオをユウと一緒に見ていると誰かがやってきた。インターホンも使わないとは古風なやつだと思いながらも、相手が誰だか分かっていたので慌てることはしなかった。玄関を開けるとそこには予想通りの顔ぶれがあった。

「待ってたよ。」

こいつらが、今日、決行しようと決めたのはいつのことだか知らないが、その情報は何処にももれていないはずだったので、俺の言

葉を聞いて彼女は少し慌てたようだ。顔に焦りが浮かんでいる。相変わらず、甘いな。と思いながらも笑顔を浮かべて、俺は動いた。
悪いがここからは俺の手のひらの上で少しばかり踊ってもらおう。なに、そんなに長い間じゃない。
とりあえず、まずは、おとなしく捕まるのはよくないから、さっさと反抗しますか。

◆◇◆◇◆◇◆

―ユウ―

今日の月華はなんか変です。どこかおかしいです。
そんなことを思いながら、私が月華と一緒に以前録画したらしいものを見ていると、どんどん、と玄関の扉がたたかれたのが聞こえた。なぜ、インターホンを使わないのかと不思議に思ったけど、月華が怒りもせずに扉を開けにいったので私は何も言おうとは思いません。だってここは月華の家ですし。
でも、急に玄関の方が騒がしくなったような気がしたかと思うと、月華が駆け込んできた。かなりあせっているのか、玄関からここまでの短い距離にもかかわらず若干息が上がっているみたい。普段見ることがない月華があせる姿を見て不安がむくりと起き上がってくるのが分かる。

イッタイ、ナニガ、オキタノ？

そんなことを聞く間も与えられず、月華は食器棚から皿などを持ってくると私にも渡してきました。どうやら、遊園地の時の彼らが来たみたいです。この皿を使って迎撃しよう、とのことだそうです。すでに逃げれることもできないので、最後の悪あがきといったところでしょう。私としてはおとなしく捕まったほうが被害が少なくていいと思うのですが。

最後の足掻きだったこともあって、私たちはあっさりと捕まってしまいます。頭の中で。声が響いているのですが、ノイズがかかっているかのようで何を言っているのかまったく分からない。目隠しをされて、視覚を遮断され、猿轡をかまらせれて、声を出す権利を奪われ、手足を縛られて自由が無くなってしまう。最後に薬品でしょうか？変なにおいをかがされて、私は意識も失ってしまった。

暗転。

◆◇◆◇◆◇◆

「計画が漏れとった・・・？」

愕然として呟いたのはこの部隊を引き連れてきて、指示を出していた女性だ。彼女たちがこの計画を今日、実行することに決めたのはわずか三日前のこと。それまでに情報が漏れないように細心の注意を払っていたのは彼女自身がよく知っているだろう。だが、この家の主である彼が言った一言。

「「待っていた」？どうやって、知ったというんです？」

イントネーションはいつものままのせいか、いまいち緊張感に欠けるが彼女は知られていた、という事実に気味の悪いものを感じて彼女は月華も一緒に連れて行くように部下に命じた。もともと長居する予定は無かったのだろう。その言葉に家の中にいた部下達全員も一緒に外へ出て行った。最後に家を出て、人払いの結界を張ったものの、誰もこちらを見ていないことを確認してから、彼女は車を発進させるように命じた。

## 第二十五話（前書き）

早押しクイズではないのに答えた者が勝ちを得る

多くの人は答えることをしない

間違えた時が怖いから、分からないから

誰かが答えを出すのを待ち続けている

# 第二十五話

―悠―

今日の俺はすこぶる疲れていた。ここ最近休みがちだった分を取り戻すためにがむしゃらに仕事をし、それでも、ユウに会いたくて、頑張って定時に会社を出てきたのだ。やった仕事量はいつもの二倍はあったかもしれない。

だが、そんな疲れは吹っ飛んだ。

今、目の前にいるやつの存在によって。

「はじめまして。」

そう言いながらも飯を食い続けるやつの髪はきれいな金色。俺の頭の中に宮内から聞いた言葉が思い出される。

「お前、月華の彼女か？」

「えー、違うよぉ。まぁ、おにーさんも座って座って。月華なら今に来るから。ボクの名前はアリス。おにーさんは？」

こいつが月華の言っていたアリスか。

「俺は神崎悠だ。」

「ん？神崎、悠って言った？」

「ああ。それが…。」

どうかしたか？と聞こうとしたところに月華がやってくる。特に何も持っていなかったが月華も席に着くと一緒にご飯を食べ始めた。俺も、食べ始める。ユウはもう寝ているとのこと。

「そういえばさ、月華。」
「なんだ？」
「このおにーさんって、涼（スズ）のおにーさんなの？」
「そうだぞ。」
「グッ。」

一瞬、口に入れたもの盛大に吹きだしてしまいそうになった。というか、あまりにも普通に切り出されすぎて聞き流しそうになった。なんで、俺とは初対面のはずのこいつの口から涼の名前が出てくる？

「お前は、涼を知っているのか！？」

ようやく、口のものを飲み込んで聞く。これは俺にとってとてつもなく重大な問題だった。

「知ってるよ。」
「じゃあ、今は何処にいるんだ？」

知ってる、という彼女に俺は質問をし続けた。元気なのか？会えるのか？といった類の質問だ。だが、アリスは知っている、ということ以外は答えない。答えずに飯を食べている。
いらいらする。知っているのに答えないその態度がとても俺の気に障った。

◆◇◆◇◆◇◆

食後、唐突にアリスは語りだした。涼のことを知りたいなら聞いてほしいと。

「キミたちの言うユウが、涼だよ。」

一番はじめに言ったことがそれだった。

「でも、キミたちの、特におにーさんにとっては、彼女は涼じゃないかもしれない。」

意味が分からないことを言ってくる。涼は涼なのだから何が違うのかが分からない。

「だったら、何がどう違うか説明しろよ。」

俺自身が驚くほどの低い声だった。アリスはなんというか、泣きそうな顔で微笑んだ。ちなみに月華は横にいるが一切何も言ってこない。傍観を決め込むつもりなのかは分からないが話はちゃんと聞いている。

◆◇◆◇◆◇◆

ーアリスー

スズのおにーさんが予想以上に『涼』に固執しているのを聞いて、ボクはこの人がとてもかわいそうになった。

『いいじゃない。このシスコンに事実を突きつけてやりなさいよ。』

「蒼夜…。」

ボクとそっくりな相棒がクスクスと笑いながらおにーさんを指差

す。彼はボクが何を言ったのかいぶかしげにしている。ボクの一挙一動を見逃さないようにと細心の注意を払っているのが分かる。こういうタイプは説明して納得しないと引かない。というのは理解している。

仕方ない、話そう。包み隠さず、彼に絶望を与えることにしよう。

「まず、キミは異世界というものを信じるかい？」

「は？」

きょとんとした顔。ま、当たり前の反応だね。

「異世界、異なった世界。ボクはそこの住人だよ。魔法がある、不思議世界の住人。まぁ、別に理解してくれなくてもいい。これから話すことにこの事実が大きく関わってくるから。」

まだ、理解しきっていないような顔をしている彼を気にせずボクは話す。

「異世界へわたる時には『穴』を開く必要がある。これは人によっちゃあ扉って言う人もいる。この穴は、限られた人物しか開くことができない。一人で開くには大量の魔力を消費する。それに、この『穴』は一人であけることができても、きちんと維持しないとすぐにゆがみが生じてしまう。ここまでは、いい？」

一応、と頷く彼を確認して話を進める。

「複数の人間であけるときは余計に大変だよ。誰か一人でも魔力の放出量を誤ったらそこでゆがみが生じてしまう。歪みはその『穴』を通る存在に影響を与える。例えば、記憶喪失。」

ここで、彼がピクリと反応を示したけどボクは気にせず話を進める。

「記憶喪失もつらいけど、物によっては腕消失、内臓消失、ひどければ死んでしまう。

実は、この症状は人為的に発生させられて、かつ歪みを持った『穴』の場合のものでね、人為的に発生させたものでも歪みがなければ『穴』は何の影響も持たない。」

ここで、お茶を飲む。月華が淹れてくれたものだ。うん、おいしい。

「『穴』を作るのは人だけじゃない。自然発生というのもある。世界が作り出すんだ。」

「世界？」

彼の質問に大きく頷く。自然発生も気になるが世界が作るというところが気になったのか。

『いいところをついてきたんじゃない？』

「ちょっと、蒼夜は黙ってて。ああ、なんでもないよ。気にしないで。」

いぶかしげにこっちを見る彼に答える。月華は蒼夜のことを知っているので、何も言ってこない。

「『穴』を通って世界を行き来するのは本来なら『その世界になかったはずのモノ』になる。それが、世界に影響を与える。それに世界同士も互いに干渉しあっていてね。世界は外部からの干渉にすこぶる弱い。」

他人との付き合いがうまくいかなくてストレスを感じるんだよ。というと彼は割りとあっさり納得した。どうやら彼自身にもそういう経験があったらしい。

「影響、干渉によって生み出された世界のストレスは、歪みの象徴でもある『穴』を作り出すという形で発生する。それは、人が作ったものと違って、とても人を惹きつける。そして、この世界が作った『穴』に入った人間はその世界からいなくなってしまう。

だから、よく神隠しだと言われることがある。」

◆◇◆◇◆◇◆

―悠―

ここまで、聞いてはみたものの何がどうなっているのかさっぱり分からない。

少なくとも、分かったことといえば涼はどうやら自然発生した穴に入ったのだろうということだけだ。少ない、というか一つしかない。途中で、そうや、と言っていたけれど、ほかに誰かいるのだろうか？月華が何も言わないので、俺も何も言わないが実際どうなんだろう。

「ここからがキミにとっては、とてもつらい話になるけど、いい？」

改めるようにして聞いてくるアリスに俺は強く頷いた。

言葉を聞き、事実を突きつけられることによって強いショックを受けるとはこのときはまだ、想像もしていなかった。

## 第二十五話（後書き）

「バトルシーンが書けなかった紅月が通りますよ。」
『本当は私たちが大活躍して、さらわれた月華たちを助ける予定だったのに』
「まぁ、そうふてくされないでいこうよ」
『あなたはまだいいじゃない。私の出番なんてそのバトルシーンぐらいしかなかったのに…』
「単純に紅月にそれを書くだけの技術がなかっただけだけどね。あと、話の前後が繋ぎにくくなるって言ってた。」
『もう、いいわ…。いつか絶対まともに出してもらうわ。』

## 第二十六話（前書き）

ピースがかちりとはまっていく

足りないピースは作る過程でなくしたものばかり

探しても見つからなかったそれはハートの女王の手の中に

# 第二十六話

―悠―

「自然発生した『穴』にも歪みが存在するの。その歪みの影響は人が作ったものと違ってランダムではないけれどそれよりひどい。」

そこで一呼吸置くアリス。今の俺にとってはその一呼吸がとてもどかしい。

「自然発生の『穴』を通り抜けることは普通の人間にはできない。普通の人間は『穴』の持つ圧力とも言うべき力に呑まれてしまう。」

「呑まれた人間はどうなるんだ？」

月華の質問に少なからず驚く。てっきりだんまりを決め込んでいるのかと思った。

「呑まれた人間は記憶を奪われ、人としてのカタチを無くして『穴』の狭間を漂い続けることになる。ソレは同じように自然発生の『穴』から入ってきた人間の記憶とカタチを奪おうとする。」

無くしたものを取り戻すために奪うんだよ。

沈黙。

アリスはそこまで言うとお茶を飲む。月華は何かを考えているのか何も言わない。

俺は――――。

◆◇◆◇◆◇◆

―アリス―

スズは狭間の亡者にはならなかった。その事実は彼にとって救いであると同時にどうしようもないくらいに悲しいこと。
できれば今ここで逃げ出したいけどそれはきっと彼ではなく月華が許さないだろう。

『殺してしまえばいいじゃない。』
（物騒なこと言わないでほしいな。あと、そうホイホイ人の心を読まない。）

殺せば、確かに話す必要は無くなる。でもそれはしない。月華はボクにとって大事な人だから。

◆◇◆◇◆◇◆

―悠―

「それじゃあ、涼は、どうなったんだ？」

アリスはつらい話になると言ったがまだ辛いとは思っていない。どちらかと言うと不安の方が大きい。
涼はまさか穴とやらに呑まれて狭間をさまよっているのではないかと。

「違うよ。」

アリスは俺の心を見透かしたように首を降る。

「今話したのは、普通の人間の場合。でもスズは普通じゃなかったから。
ああ、そんな怖い顔をしないで。普通じゃないっていうのはボクみたいに魔法を使えるってことだから。」

魔法、と言われて思い出したのが以前ユウもとい涼がやったと思われる不思議なこと。あの時は追われていて、それのおかげで逃げきれたのだけど、今思うとそれがアリスの言う魔法というやつか。

「『穴』を通るときに人は自然と選別される。力を持つものはその力を強制的に覚醒させられる。狭間の亡者は力を持つ者には手を出せない。だから『穴』を抜けることができる。
力を覚醒させられた代償か、はたまた『穴』を通り抜けた代償か。どちらでもないのかはわからないけど、『穴』を通った人間はあるものを無くしてしまう。」

言いにくそうにするアリスに俺は先を促した。ここまで来て何も言わないのはあまりにもひどすぎる。

「知りたいなら言うけど、記憶を奪われる。その人間が一番大切な存在に対する、ね。
それがどうした、っていう人もいると思うけどこれはけっこう徹底しているの。」

曰く、その人物の中でその存在がなかったことになる。
曰く、忘れたのではなく奪われたことになるので思い出すことがない。
曰く、忘れてしまった存在とはもう二度と会えなくなる。

「スズにとってそれはおにーさん、キミのことだったんだよ。」
「だとしたらおかしいぞ、アリス。」
「何がおかしいんだ？俺には全くわからないぞ。」
そう言った俺を月華が冷めた目で見てくる。そして、懇切丁寧な説明をしてくださいました。
「あのな、アリスは一番始めにユウが涼だと言っただろ？で、涼が忘れたのはお前の事だと、アリスはそうも言った。それなのにお前はユウ（涼）と出会った。おかしいとは思わないのか？」
「……ああ、なるほど。」
アリスの理論を適用するなら俺はユウ（涼）とは出会えていなかったはずだ。
説明してくれ、という月華の言葉にアリスはうなずいた。
「正直、ボクも驚いたんだよ。これはボクの仮説なんだけどスズは記憶喪失になっていた。つまりこっちの記憶が一切なくなっていたんだよね。
だから、世界は見落としたのかもしれない。
ちなみにスズが『穴』を通ることで覚醒した力は《言語の自由》といってね、どんな言語でもしばらく聞いていると理解できるようになるんだ。文字も読めるようになる。
だから『言（ゲン）』の技はスズにはとても向いているんだ。
」
「げん？」
「ん？ああ、普通は言とは言わないんだったね。言霊って言えばわかる？」
「まあ、一応。」
「言、言霊の発動に必要な条件は『自分のいっている言葉が相手に

理解できる言語である』だからね。どんな言語でもすぐにマスターできるスズにはもってこいってこと。」

「なるほど。」

聞きなれない言葉だったので思わず聞き返すときちんと答えが捕捉付きで返ってきた。　月華に比べると数倍は優しい。あいつは自分で考えろとか言って教えてくれないことが多いからな。

◆◇◆◇◆◇◆

―アリス―

言うべきことは全部言ったはずだからもう終わりだね。

『何いってるのかしら？肝心なことを言ってないじゃない。』

（肝心なこと？）

蒼夜は楽しそうに肝心なことを伝えてくる。ソレを聞いてああそういえば、なんて思ってしまった。

まさか、蒼夜に指摘されるとは。

「そうそう、いい忘れていたことがあったんだった。」

## 第二十六話（後書き）

「今まで投稿しなかったのが嘘のようなペースだね。」
『もともとこの辺の流れは頭の中にあったと言うから。』
「グダグダやってきたけどこれももうすぐ終わっちゃうのかー。」
『あと二か三話といったところみたいよ。』
「少なくとも五話以内。」
『最後の方はそう待たせずに投稿したいといっていたから次もわりとすぐかしら？』
「そうだといいねぇ。それではまた次回。」

## 第二十七話（前書き）

進め、進め、進め

脇目も降らずにただただ進め

その先にあるものをお前は知っているのだから

# 第二十七話

―悠―

「そうそう、いい忘れたことがあったんだった。」
「一つ聞きたいことがある。」

アリスと月華の声が重なった。いまさらながら月華はアリスのする説明についていけているのかと感心してしまう。でも、アリスの見た目はこの間、宮内たちが言っていた『月華の彼女―《偽》』と一致する。月華の家に堂々といたことといい、こいつが月華の『昔』に関わっているのは間違いないだろう。

「なに？」
「ユウ、いや涼か？まぁ、どっちでもいいが、記憶を取り戻したあいつはこれからどうなる？」
「ちょうど、ボクもその話をしようと思っていたんだ。」
「いやいや、ちょっと待て。二人とも。」

このまま、話を進めていきそうな二人を俺は止める。

「今なんて言った？月華。」
「記憶を取り戻したあいつはこれからどうなる、か？」
「そうそう、誰が記憶を取り戻したって？」
「ユウに決まっているだろう。」

ナンデスト？

「いつ？」

「今日のことだな。」
「どうやって？」
「それはボクがちょちょっとやっちゃいました。」

何でも、今日の昼にいろいろあったらしい。いろいろの部分はあまりにも信じれなかったので割愛させていただく。なんにせよ、その過程で、ユウには記憶を取り戻してもらって人働きしてもらったとか。

「で、何があったって？」
「いや、信じれないなら聞き返さなくてもいいんじゃない？」
「だって信じられるか！！」

こいつ（アリス）、世界的に有名な企業の日本支部に行って壊滅させてきたって言うんだぜ？信じられるか！！

「まぁ、その話は置いといて。」
「置いとくな！！」

手を右から左へ持っていくジェスチャーをするアリスに怒鳴る。

「スズのことなんだけど。」

その一言で俺の怒りが押さえられた。恐るべし、涼。

「記憶は取り戻しているけどやっぱりおにーさんのことは覚えてないよ。あと、もしもスズが望むならここに住んでもいいって許可をもらってきたよ。」
「誰から？」
「世界から。」

俺の質問には軽く答え、月華の方を向いてこれでいい？とたずねるアリス。最近思うが、俺の扱いがどんどん軽くなっている気がする。

「今回は異例ってことでこのままここに住むならこれからもスズはおにーさんに会うことができるよ。

でも、もとの、というかボクらの世界に帰ったらスズはおにーさんに会えなくなる。……逆だね、おにーさんがスズに会えなくなるんだ。」

◆◇◆◇◆◇◆

あの言葉を聞いたあと、俺はおとなしく寝た。俺には受け入れきれない現実から逃げ出すのと、認めたくなかったからで。

ユウもとい涼がもしも向こうに帰ると言ったら。そう思うと怖くて仕方なかった。確かに行方不明になった時から考えると、人生の約半分を向こうで過ごしているから帰りたいという気持ちもわからないでもない。でも、それは向こうにいくまでの八年間と、俺と再開してからのここしばらくを全否定されることのような気がして、それが怖くて認めたくなかった。

そして、次の日である今日。涼自身にどうするかを聞くことになっている。

ちなみに昨日、俺が帰ってきたときに涼が寝ていたのは記憶を取り戻したショックによるものだったらしい。

◆◇◆◇◆◇◆

―ユウー

明るい光があたしに目覚めを促す。アリスにも何も言われていないけど、選ばないといけないのはなんとなくわかっている。ぼんやりとそう考えながら着替え、みんながいるであろうリビングに行く。心配をかけないように。

「おはようございます。」
「おはよう、スズ。気分はどう？」
「大丈夫。それよりも久々にアリスに会ってほっとしちゃった。」
「それはまた嬉しいことを言ってくれるね。」

アリス。あたしがお母さんと迷い込んだ穴の先で出会った彼女は今も昔も変わらずあたしに優しい。そして、その変わらない優しさに嬉しくなる。

「おはよう。ユウ、いやスズ、か？」
「どっちでもいいですよ。月華お兄ちゃん。」
「その呼び方はやめてほしいな。」
「だって昔はそう呼んでいたじゃないですか。」
「今はやめてくれ。」
「わかりました。」

月華。昔はよくあたしと遊んでくれた近所の人。ここに来たときに衣食住を世話してくれた人。アリスとは知り合いだったみたいでそれに一番驚いた。
そして、もう一人。

「おはよう。」
「おはようございます。神崎さん。」

この世界に来たときに一番始めに出会った人。この人がいなかっ

たら、今ここにあたしはいることができなかったかもしれない。そういえば月華と友達みたいだけど、あたしには覚えがない。この近辺にいた神崎姓はあたしの家だけのはずだから、あたしがいなくなったあとにできた月華の友達かもしれない。

「さて、スズ。早速だけど決めてほしいことがある。このままこの世界に留まるか、それとも、向こうに帰るか。

前者を選べばこっちでの戸籍とかは全部用意してあげるから何の問題もないよ。後者を選べば以前と同じような生活に戻るよ。すぐにとは言わないよ。今日中に……。」

「決めているから今、言うよ。」

アリスが目だけでいいの？と訪ねてくるのに頷き返す。もう心は決まっている。でも、あたしのこの選択はどちらを選んでも悲しい思いをする人がいる。わかっているけど、選んでしまったからあたしは選択を伝えるために口を開く。

「あたしは……。」

## 第二十七話（後書き）

「ついに、スズが決意しました。」
『ついにって言うほど悩んでいた描写がなかったけど。』
「それは言わない。」
『でも、こうやって連載し続けてこれてよかったわね。』
「そこは紅月が一番びっくりしてるんじゃない？まぁ、それは置いといて、次回が最後の山場なんじゃない？」
『紅月いわくそうらしいわね。』
「それではまた次回。」

## 第二十八話（前書き）

ここでの思い出を忘れることはないけれど
昔忘れてしまった人は、面影すらちらつくことはない
だって、忘れたことすら覚えていないのだから

# 第二十八話

―スズー

「あたしは……帰るよ。」

「そう。いつ？」

アリスの言葉が重く感じるのはきっと選択の重み。残らなくていいの？と聞いてくれないのが嬉しい。

「荷物をまとめたいし、夕方かな？」

「わかったよ。」

「だから、ここには残れません。ごめんなさい。」

横にいる。月華と神崎さんに謝る。神崎さんはあまりにもショックなせいか、呆然としている。

「俺は、別にお前にここにいてほしいなんていった覚えはない。」

少し突き放すような月華の態度だけどそれはあたしのことが嫌いだからじゃないっていうのは、ちゃんとわかってるよ？

ささっとご飯を食べて荷物をまとめに行く。まとめると言っても月華に以前買ってもらった服ぐらいしかないからすぐに終わる。夕方までここにいるのはここを離れがたいと感じているあたしのわがままだから。

◆◇◆◇◆◇◆

ー月華ー

「そっちに帰るのか。」
「ん？寂しいの？『月華お兄ちゃん』。」
「まさか。」

寂しくはない。ユウ、いやスズが向こうの方がいいと言うならそうすべきだと思う。それに

「また会えるだろ？」
「そうだね。穴はこの家に繋げてあるし、ボクが許せばいつでもね。」
「そうか。」
「でも、おにーさんには会えないね。次からは世界は見逃さないだろうし。」
「そうか。」

今生の別れというわけでもないなら、それで構わない。

「話は終わった？ならそこで呆けているおにーさんを現実に引き戻して、飲もうか。」

どこからともなく飲み物を取り出すアリス。いつも思うがこれは酒なんだよな。未成年というのはこいつにはあてはまらないが、いったいどれだけ持っているのだろうか。

「おい、悠。」

肩を揺さぶるだけじゃ戻ってこなかったので叩いてみる。戻ってこない。
仕方ないので手ではなくプラスチックの棒で叩いてみる。

「いたっ！！」

どうやら戻ってきたようだ。アリスはすでに飲み始めている。

「お、戻ってきたね。飲もうか。」

◆◇◆◇◆◇◆

ー悠ー

悲しいことは飲んでスッキリ。と言われて渡されたものを飲む。

ああ、お酒だ。

「……って、お前は未成年だろーがぁ！！」

「気にしない気にしない。」

なんだかこいつと一緒に涼が帰ることに不安を覚えた。

「でも、何で帰るんだろう。」

「知るか。自分で聞け。」

月華が飲むのを見てなんとなくスイッチが入った。こうなったらやけ酒だ。

◆◇◆◇◆◇◆

「聞きたいことがある。」

「何かな？月華。」

飲みながらも、思考回路はしっかりしているらしい月華が、アリスに尋ねる。聞きたいこととはなんだろうか。

「あいつらは、何を目的にしていたんだ？」

「あいつら？ああ、月華たちを拉致っていったやつらだね。彼らは、主にボクに復讐したい連中だったんだよ。」

「復讐だって？」

不穏な単語を聞きつけたのか、悠も会話に混じってきた。手にはしっかりとお酒の入ったグラスを握っている。

「そう。ボクは世界を渡る何でも屋の会社の一員でね。ボクのやる仕事は基本的に血なまぐさいものになるの。そんなときに殺し損ねたり、大事な人を殺された連中が集まったのが彼らだったんだよ。」

「じゃあ、お前が壊滅させたとかいうあの会社との関係は？」

「いいところをつくね、おにーさんは。

それは単純に利害の一致だったんだと思うよ。あそこの社長は不老不死を欲しがっていてね。異世界の存在を何処からか知った社長は不老不死だという、ボクの会社のとある人物に目をつけたんだよ。でも、いかんせん、彼自身は異世界に手を出せない。だから、彼らを利用したんだろうね。ま、以前にも一杯食わされててさ、あの時は月華に仕事を頼んだ時で、その時は殺しは禁止されてたからちょっとした脅しで終わりになったんだけどさ、それでも二度目はないと言っておいたのに懲りてなかったみたい。

なんにせよ条件は、『自分の望むことを満たしてくれるなら何をしても構わない』かな。今となってはわからないけど。で、協力してくれたお礼というか対価にこの世界での生活に必要な戸籍とかを用意していたんだろうね。」

月華はうんうん、とうなずいている。昔のことを思い出している

のか苦いものが混じっている。それに対し、悠はひらめいたかのように明るい顔をした。

「なあなあ、月華に頼んでいた仕事ってなんなんだ？」

どうやら、アリスが頼んでいた仕事とやらに興味があったらしい。だが、その質問は月華によるなんでもない、たいしたことじゃなかった、の一言で強制的に終了させられる。それでもなお、質問し続ける悠の首に冷たいものが当てられる。

「答えたくないんだから、あんまり問い詰めないでよ。殺すよ？」

冷たい一言に悠の酔いが一瞬にして引く。悠が冷や汗混じりの乾いた笑いを浮かべながら降参の意を込めて両手をあげるとアリスは無表情のまま首にあたっているものを動かした。

◆◇◆◇◆◇◆

ースズー

「とりあえず、荷物をって、お酒くさっ。」

「あー、ここに置くと臭い移ると嫌だし廊下においときなよ。」

「うん。」

荷物を置いて、中に入ると、すっかり酔っ払った神崎さんと、月華、アリスがいた。神崎さんは何かをぶつぶつと呟いている。気になったので、注意深く聞いてみるとそれは、どうして私が戻るのか、というものだった。この人は、まだ会って、間もないあたしのことをそこまで気にかけていてくれたのかと、驚いてしまった。

## 第二十八話（後書き）

「最後の最後というタイミングで、お気に入り登録してくださった方がいます。ありがとうございます。そして、あと、一話＋エピローグの予定〜。」

『少なくとも、といっていた範囲におさまるのね。』

「まぁ、そうだねぇ。」

『それにしても、悠はえらく酔ったみたいだけど、あの後、何があったのかしら？』

「すべては神のみが知るってね。あんまり突っ込むと負けるよ。」

『何に？』

「気分的に。」

『そうはまったく思わないけれども、そういうものなのかしら。』

「そういうものだよ。」

『最近ここで話すことも少なくなってきたわね。これが最終回への弊害かしら。それではまた次回お会いしましょう。』

## 第二十九話（前書き）

信じるものは救われる

信じる人には信じているものしか見えなくて

見えないから自分に都合の悪いことなんて起こらないから

# 第二十九話

ー月華ー

スズが悠の顔をのぞきこんで呟くように言う。

「約束をしたの。明日、レイを連れて街を案内するって。」

痛そうに顔を歪め、そんな顔をするくらいなら言わなければいいと思うが、スズは俺にもアリスにも言っているわけではないようだった。ずっと悠の方を見ている。

「でもね、その約束は、果たせないだろうとは思っているけど、向こうにはあたしを待っていてくれる人がいるの。だから、帰るの。」

小さくも確かな声で発せられるそれは、間違いなく悠の耳にも届いているだろう。現に、さっきまで泣きそうになっていたその顔が余計に泣きそうになっているからな。

今更ながら、こいつは泣き上戸だったことを知った。そのまま堰が切れたのかスズに叫ぶように、叩きつけるように言った。

「じゃあ、俺は？お前の帰りを八年待っていたお前の兄は、どうすればいいんだ？」

おそらくあいつの心の叫びだったのだろう。でもそれをスズに言ってどうする。スズはお前のことなんて覚えていないとアリスが言っていただろうが。歯痒さに思わず舌打ちしてしまう。案の定、スズの返答は残酷なものだった。

◆◇◆◇◆◇◆

―スズー

今、神崎さんはなんと言った？

兄、と言ったのか。あたしに兄はいないはずで、あたしの家族は狭間に呑まれたお母さんと、そのお母さんを捨ててどこかへ行ってしまった父親しかいないはずで、だから神崎さんがあたしの兄を名のることはおかしいことなんだ。

「変なことを言わないでください。確かにあたしはここにいたときは『神崎』でしたけど、兄はいません。同じ苗字だからといってそんなことは言わないでください！！」

最後は叩きつけるようになってしまったけど、なんだか家族を侮辱された気がしてその思いがそうさせたのかもしれない。神崎さんの顔からは感情が消えていた。そこであたしはとてもひどいことを言ってしまったのだと気づいた。

◆◇◆◇◆◇◆

―悠ー

確かにアリスは言っていた。俺のことは覚えていないと。でも、そんな現実離れした話を信じきることができなくて、心のそこでは俺のことを忘れていないと信じていたのに。

涼が何かを言っている。謝っているようだが聞こえない。キコエナイ。涼の顔が目の前にあるはずなのに見えない。ミエナイ。

気を失っていたのだと理解したのは目が覚めてからだった。空はすっかり黒に染まっていて、その色が夜になっていることを俺に知

らせてくれた。そう、夜。

「夜！？」

ソファーから起き上がって窓の外を確認する。間違いなく、夜だった。つまり。

「今さら起きたのか？スズならもうアリスといっしょに帰ったぞ。」

……俺は見送ることもできなかったのか。情けなすぎて逆に笑いがこみ上げてくる。

「大丈夫か？」

「大丈夫だよ。」

そんなに不気味だったのだろうか。若干引いているようだが水を渡してくれる。

「大丈夫。信じれば会えるんです。会えると言葉にすれば。だって言葉には力が宿っていますから。」

月華が急に敬語を使いだしたようです。なんか怖い。ていうかきめぇ。

「スズが帰り際に言っていた。アリスは会えないと言っていたけどだそうだ。」

「そうなのか。」

「アリスいわく言葉のエキスパートであるスズが言うんだから信じてみればいいんじゃないか？」

「ああ、そうだな。」

心が軽くなる。もう二度と会えないと思ってしまっていたから、そういわれてほっとした。
次の日、会社に行ったあと、俺は荷物をまとめて家まで月華に送ってもらった。

「今までありがとな。」
「なに、俺の都合に付き合わせただけだ。これをいい機会にして別に俺の家に来てもいいんだぞ。」

もちろん、家賃は払えよ。と言って紙袋を渡してきた。

「なんだこれ？」
「まぁ、見てみろ。」
「おう、ってちょっと待て。なんだこれは。」

中身は正真正銘お札の束。それがひーふーみー。三つも入っている。新聞紙をはさんであるというご丁寧ないたずらもない。

「なんだこれは。」
「迷惑料だそうだ。」

本当にあいつは昔から支払いがいいな。そう言って去っていった。

「お前は昔アリスとなにをしていたんだー！！」

俺の叫びに答えることができるやつはもうすでに俺の視界から消えていた。

## エピローグ（前書き）

がむしゃらに突き進めば道が崩れ落ちて
あれだけいた仲間もいなくなってしまって
私はどこで道を誤ったのでしょうか
私の目の前にあった道は一本だったから誤ることなどなかったはず
なのに

# エピローグ

この話がどうしたかって？おそらくお前が知ることがなかった裏側の話だよ。

俺のところにわざわざ来たのだから、これからアリスに会いに行くんだろう？異世界に行くだけなら俺のところに来る必要はないからな。で、どうする？すぐに行くのか？……そうか、わかった。じゃあついてきてくれ。

何でこんな話をしたかって？うん、そうだな。俺とアリスがそれなりに昔から知り合いだっていうのはわかっただろ？だからそれなりにあいつの性格を把握しているつもりなんだがな。あいつはお前が死んだと思っている。しかも、お前にたいしてやった行為じゃまだ満足していないらしいから、今お前があいつの前にいくということはこの間よりももっとひどい目にあわされる可能性があるってことだ。だからこれは俺からの優しさなんだよ。

それでも、行くのか。なら止めはしない。じゃあ頑張って。

生き残れって意味じゃないぞ。じゃあどんな意味かと聞かれてもな。

とりあえず元気でな。

死ににいく自分にかける言葉として間違ってないかって？一言余計だな、お前は。

まあ、いいさ。かつての恨みをはらすためでも、仲間の敵討ちでもいいから行けって。ああ、じゃあな。

## エピローグ（後書き）

「無事に完結。よかったね。」
『紅月いわく回収しきれてない部分がいくつもあったらしいけど、そこはコメントでも寄せてもらえば返答するか短編として書くつもりのようよ。』
「ふーん。まあ、紅月がちゃんと後書きやるって言うからあとは任せようか。」
『そうね。今までお付き合いいただきありがとうございました。このあとがきは私、蒼夜と。』
「ボク、アリスがお送りしました。ちなみに勇者未満の方のあとがきにもいるからよかったらそっちも読んでください。」
『それじゃあ紅月に代わるわね。』

完結したので紅月がお送りします。
まず始めに最後まで読んでくださってありがとうございました。
自分の初投稿作品であるこの作品には多々読みづらい箇所があったと思います。
それでも自分にとって、かけてよかったと思えるものになりました。
これからも頑張って他のを書いていきますのでこれからもよろしくお願いします。
二度目ですが、この作品を読んでくださって本当にありがとうございました。
これをもって『神崎涼の失踪』完結です。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3557i/

神崎涼の失踪

2010年10月15日22時53分発行